

内閣府食品安全委員会事務局
平成20年度食品安全確保総合調査報告書

食品の安全性の啓発に関する調査

調査報告書

平成21年1月

株式会社NHKエンタープライズ

目 次

I. 総 括

1. 調査概要.....	3
2. 調査結果の要約.....	10
(1) 食品安全についての、小学生と親の意識.....	10
(2) 啓発効果について ～ビデオ視聴後の意識の変化～.....	14
(3) 明らかになった課題.....	22

II. アンケート集計結果のまとめ

1. 意識調査 (※印は、小学生向けの質問文。内容は親子共通)

Q1. あなたは食品をどこでよく購入していますか？.....	26
Q2. ご家庭の夕食は主に誰がつくりますか？.....	27
Q3. あなたは食材の購入、総菜・中食・弁当の利用、外食をどのくらいしていますか？ (※自分では食材を買ったり、そうざいや弁当を利用したり、外食をどのくらいしていますか？).....	28
Q3-A. 食材の購入.....	28
Q3-B. 中食.....	29
Q3-C. 外食.....	30
Q4. 小学校5, 6年生のお子さんはいつごろから自分の意思でお菓子などを買うようになりまし たか？(※あなたはいつごろから自分でお菓子などを買うようになりましたか？).....	31
Q5. 食品や農産物に関する次のものについて、あなたはどのように思いますか？.....	32
Q5-A. 農薬.....	32
農薬: 自分や家族に健康被害の可能性がある	
農薬: 安全性について検討されている	
農薬: 使用基準等があり安全管理されている	
農薬: 安全性について情報を知る機会がある	
Q5-B. 食品添加物.....	34
食品添加物: 自分や家族に健康被害の可能性がある	
食品添加物: 安全性について検討されている	
食品添加物: 使用基準等があり安全管理されている	
食品添加物: 安全性について情報を知る機会がある	

Q5-C. 遺伝子組換え食品.....	36
遺伝子組換え食品: 自分や家族に健康被害の可能性がある	
遺伝子組換え食品: 安全性について検討されている	
遺伝子組換え食品: 表示基準等があり安全管理されている	
遺伝子組換え食品: 安全性について情報を知る機会がある	
Q5-D. 牛海綿状脳症(BSE)	36
牛海綿状脳症(BSE): 自分や家族に健康被害の可能性がある	
牛海綿状脳症(BSE): 安全性について検討されている	
牛海綿状脳症(BSE): どのように安全管理されているか知っている	
牛海綿状脳症(BSE): 安全性について情報を知る機会がある	
Q5-E. メチル水銀	38
メチル水銀: 自分や家族に健康被害の可能性がある	
メチル水銀: 安全性について検討されている	
メチル水銀: どのように安全管理されているか知っている	
メチル水銀: 安全性について情報を知る機会がある	
Q6. 次の言葉を知っていますか?	40
ハザード	
リスク評価	
リスク管理	
リスクコミュニケーション	
リスク分析	
食品安全委員会	
Q7. 以下のようなところに見学に行ったことがありますか?	42
Q8. 食品安全に関することで、以下のようなところに問い合わせをしたことはありますか?	44
Q9. 食品安全委員会が行っている意見交換会へ参加したことはありますか?	46

2. 啓発効果測定調査

Q1. 食品や農産物に関する次のものについて、あなたはどのように思いますか？	48
Q1-A. 農薬.....	48
農薬: 自分や家族に健康被害の可能性がある	
農薬: 安全性について検討されている	
農薬: 使用基準等があり安全管理されている	
農薬: 安全性について情報を知る機会がある	
Q1-B. 食品添加物.....	49
食品添加物: 自分や家族に健康被害の可能性がある	
食品添加物: 安全性について検討されている	
食品添加物: 使用基準等があり安全管理されている	
食品添加物: 安全性について情報を知る機会がある	
Q1-C. 遺伝子組換え食品.....	50
遺伝子組換え食品: 自分や家族に健康被害の可能性がある	
遺伝子組換え食品: 安全性について検討されている	
遺伝子組換え食品: 表示基準等があり安全管理されている	
遺伝子組換え食品: 安全性について情報を知る機会がある	
Q1-D. 牛海綿状脳症(BSE)	51
牛海綿状脳症(BSE): 自分や家族に健康被害の可能性がある	
牛海綿状脳症(BSE): 安全性について検討されている	
牛海綿状脳症(BSE): どのように安全管理されているか知っている	
牛海綿状脳症(BSE): 安全性について情報を知る機会がある	
Q1-E. メチル水銀	52
メチル水銀: 自分や家族に健康被害の可能性がある	
メチル水銀: 安全性について検討されている	
メチル水銀: どのように安全管理されているか知っている	
メチル水銀: 安全性について情報を知る機会がある	
Q2. 次の言葉を知っていますか？	53
ハザード	
リスク評価	
リスク管理	
リスクコミュニケーション	
リスク分析	
食品安全委員会	

I . 総括

1. 調査概要

(1) 調査テーマ ≫

食品の安全性の啓発に関する調査

(2) 調査目的 ≫

小学5・6年の子どもとその親を対象に、食品安全についての意識調査を行い、食品安全についての意識の実態を把握する。さらに、食品安全についてのビデオを視聴してもらい、再度アンケートを実施。啓発効果を把握する。

(3) 主な調査項目 ≫

<意識調査>

以下の項目について把握できる質問内容を設定した。

(質問内容の詳細は【調査①】食品安全についてのアンケート 意識調査の構成を参照)

- ◇ 行動の実態
- ◇ 食品安全への意識
- ◇ 食品安全に関連する言葉の認知
- ◇ 見学や問い合わせの経験

<ビデオによる啓発効果測定調査>

- ◇ 以下の項目について把握できる質問内容を設定した。(質問内容の詳細は【調査②】食品安全についてのビデオアンケート 啓発効果測定調査の構成を参照) 食品安全への意識

- ◇ 食品安全に関連する言葉の認知

(調査に用いたビデオ)

親が視聴したビデオ 『食品安全の基礎知識 クイズで学ぶリスク評価』 約 12 分

小学生が視聴したビデオ 『気になる食品の安全性 みんなで学ぼう リスク分析』 約 18 分

(4) 調査対象 ≫

全国の小学5・6年生およびその親を対象に実施。

ビデオによる啓発効果測定調査は、意識調査の回答者を対象とした。

<意識調査>

子(小学5・6年)	2000人
親	2000人
計	4000人

<ビデオによる啓発効果測定調査>

子(小学5・6年)	120人
親	120人
計	240人

(5) 調査方法 》

Web アンケート調査

意識調査では全国の親子各 2000 人という大量サンプルの回答を必要とする点、啓発効果調査ではビデオ視聴が必須条件となっている点、かついずれの調査も短期間で目標の有効票の回収を実現できる点から、調査方法として Web アンケートが最適であると判断した。

また、以下の既存の調査結果が示すとおり、パソコンは小学生のころからすでに高い割合で使用していることが確認されているため、小学 5・6 年の子どもにおいても十分アクセスは可能と判断した。

【参考データ】 出所:内閣府「情報化社会と青少年に関する意識調査」平成 19 年 3 月

小学生 319 人(満 10 歳以上 4 年生 4 人、5 年生 164 人、6 年生 151 人)の回答結果

- 小学生のパソコン使用:77.4%
- 小学生のインターネット利用:58.3%
- 小学生のインターネット利用の内容:
学校の宿題 67.2%、ホームページやブログを見る 57.5%、メール 15.6%

(6) 調査期間 》

平成 20 年 9 月～平成 21 年 1 月

<意識調査>…平成 20 年 11 月中旬実施

↓

ビデオ制作

↓

<啓発効果測定調査>…平成 21 年 1 月中旬実施

(7) 検討会の概要 »

10月から1月にかけて(合計4回)行った検討会で、以下のような方針・意見等にまとまりました。

検討委員メンバー

- 石井克枝(千葉大学教育学部 教授)
- 牛澤賢二(産業能率大学経営学部 教授)
- 堀口逸子(順天堂大学医学部公衆衛生学教室 医学博士)
- 八木絵香(大阪大学コミュニケーションデザインセンター 特任講師)

意識調査の設問について

- 食品安全委員会の意識調査及び啓発ビデオの作成なので、「リスク評価」にウエイトを置いた設問で意識調査を行った方が良いと思う。
- 何に着目して評価をするのか。基本はやはり知識量での評価ではないか。一般生活者には馴染みがない専門用語、例えば「リスク評価」「リスク分析」などを知っているか?の設問があれば良いと思う。
- 食品に関する「リスク認知」のアンケート調査は見たことがない。「各化学物質が自分にどれだけ危険だと感じるか」のような設問で「リスク認知」を測ってみてはどうか。
- 子どもが自分の意志で食品を購入する年頃がわかると、子ども向けの食育を行うタイミングがわかる。そういう設問があっても良いと思う。
- どこで食品を購入するのか、生協の利用の有無、家庭でどのくらい料理をしているか、誰が夕食をつくっているのか、中食・外食の利用はどの程度かなど、食生活の実態がイメージできるような設問があった方が、興味深い分析ができるのでは。
- 家族構成を聞いておく必要はあると思う。
- 意見交換会は新しいリスコミの場。意見交換会へ参加されたことがありますか?という設問があっても良いと思う。
- 知識量やリスク認知を測る意識調査を行うのであれば、自由記述回答は不要だと思う。

意識調査の集計結果を見て

- 属性別、親子別、男女別(父母別)のクロス集計を行った方が良いだろう。
- 食品工場の見学経験がある人が多いと感じる。しかし、それにも関わらず、各施設や専門機関への問い合わせ経験が非常に低いので、啓発ビデオでは、食品安全委員会への問い合わせができることを伝えるべきではないか。
- 食品安全委員会が何を行っている行政機関であるか理解が深まっていないので、啓発ビデオの登場人物が食品安全委員会へ「どんな仕事をいつも行っているのか?」と単純に聞く/尋ねるようなシーンが啓発ビデオの中にあっても良いと思う。
- 食品安全委員会の専門調査会の風景だけでなく、その準備(過程)、電話相談の対応、意見交換会などの風景も紹介して、食品安全委員会の仕事ぶりを表現したら良いと思う。
- 小学校高学年の子どもには、「リスク評価」や「リスク分析」などの専門用語の説明は大変難しく感じると思う。また、知らない専門用語が続くと子どもは混乱する。専門用語を覚えてもらう必要はなく、重要な概念が理解されていれば良いのではないかと。

- 「心配」「安心」の2語も使わない方が良いと思う。
- 「あれもダメ、これもダメ、と色々と心配し始めると食べるものが無くなってしまう」という切り口でストーリーを始めたらどうか。また、子どもはクイズ好きなので、“クイズ”を導入するのは良いと思う。
- 食の安全は、知識を持つだけではなく、結局は自分で判断をしなければならないということを伝えるべきだと思う。
- 主人公が見学へ行く場所は、食品工場ではなく、動物実験も行っている食品医薬品衛生研究所が良いだろう。

ビデオの構成の方針

- 食品のリスクに関する新しい考え方(「リスク分析」と、食品安全委員会の仕事は「リスク評価」であることを、わかりやすく伝えることを最優先事項とする。
- 農薬や食品添加物などの化学物質による健康被害が気になる主人公(子ども2人)が「食品衛生研究所」へ見学に行つてその疑問を解くというテーマ設定にする。
- 構成の基本方針は、主人公の「問い」(=視聴者の「心理」)に応えるかたちで情報提供していくこととする。また、重要な概念、例えば「用量作用の関係」「1日摂取許容量」「危険と出会う確率」「リスク認知の重要性」などの説明はVTR(ナレーション)化して、主人公のやりとりの間に挿入。「問い」を持つ主人公(=視聴者)が目的意識を持ってVTRを見ることができるようになる。
- 主人公は、「クイズ」がきっかけで、食品安全委員会の存在を知ることになり、テレビ電話を通じて「食品安全委員会は、具体的には、いつもどんな仕事をしているのか?」という「問い」を食品安全委員会へ投げかけるシーンをつくる。
- 食品安全委員会の仕事ぶりを風景映像(会議風景やその準備の過程など)で表現する。
- できるだけ専門用語は使わずに、しかし重要な概念はきちんと理解できるように、会話やナレーションの言葉選びを工夫する。

ビデオの試写を終えて

- 子ども向けのビデオは解説がきちんとVTR化されていてとてもわかりやすい。「お芝居」と「インサードVTR」がテンポ良く交互に出てくるので、最後まで飽きることがなく見ることができる演出になっている。
- 大人向けのビデオは「設問」が少し難しいが、クイズ形式にしたことで、テンポ良く最後までビデオを見ることができる演出になっている。

啓発効果結果を見て

- 概ね啓発効果があったと言えるだろう。特に子どもは大人における啓発効果よりも明らかに大きい。
- 啓発効果が若干マイナスの振れている部分の主な原因は、「100%安全な食品はない」とビデオの中で伝えたことによるものと推測する。

【調査①】食品安全についてのアンケート 意識調査の構成

質問内容	分類・備考
Q1. どこで食品購入するか	行動の実態
Q2. 夕食はだれが作るか	行動の実態
Q3. 食材購入・中食・外食の頻度	行動の実態
Q4. 子どもの意思での食品購入の時期	行動の実態
Q5. 食品安全への意識 農薬、食品添加物、遺伝子組換え食品、牛海綿状脳症(BSE)、メチル水銀の5項目について、以下の各4問、計20問を質問 ・自分や家族に健康被害の可能性がある ・安全性について検討されている ・安全管理されている ・安全性について情報を知る機会がある	食品安全への意識 【調査②】Q1と共通
Q6. 食品安全に関連する言葉の認知 ハザード、リスク評価、リスク管理、リスクコミュニケーション、リスク分析、食品安全委員会の6つの言葉についての認知度	食品安全に関連する言葉の認知 【調査②】Q2と共通
Q7. 見学の経験	見学や問い合わせの経験
Q8. 問い合わせの経験	見学や問い合わせの経験
Q9. 食品安全委員会の意見交換会への参加経験	見学や問い合わせの経験

【調査②】食品安全についてのビデオアンケート 啓発効果測定調査の構成

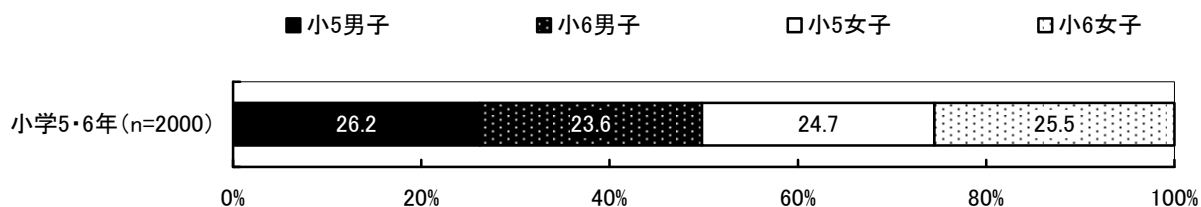
質問内容	分類・備考
Q1. 食品安全への意識 農薬、食品添加物、遺伝子組換え食品、牛海綿状脳症(BSE)、メチル水銀の5項目について、以下の各4問、計20問を質問 ・自分や家族に健康被害の可能性がある ・安全性について検討されている ・安全管理されている ・安全性について情報を知る機会がある	食品安全への意識 【調査①】Q5と共通
Q2. 食品安全に関連する言葉の認知 ハザード、リスク評価、リスク管理、リスクコミュニケーション、リスク分析、食品安全委員会の6つの言葉についての認知度	食品安全に関連する言葉の認知 【調査①】Q6と共通

サンプルの特徴

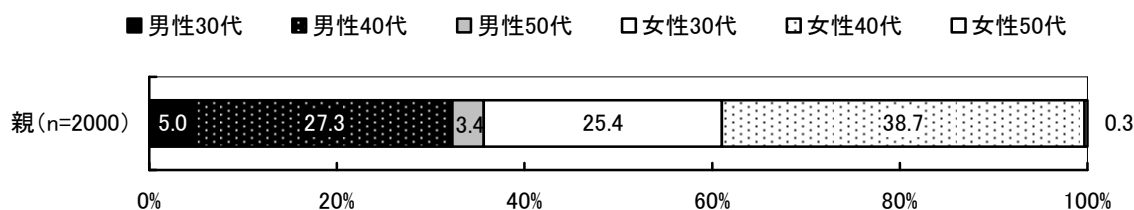
以下は、対象となった小学5・6年の子どもとその親の、基本属性である。

＜意識調査＞・・・小学5・6年の子ども2000人、親2000人、計4000人を対象とした。

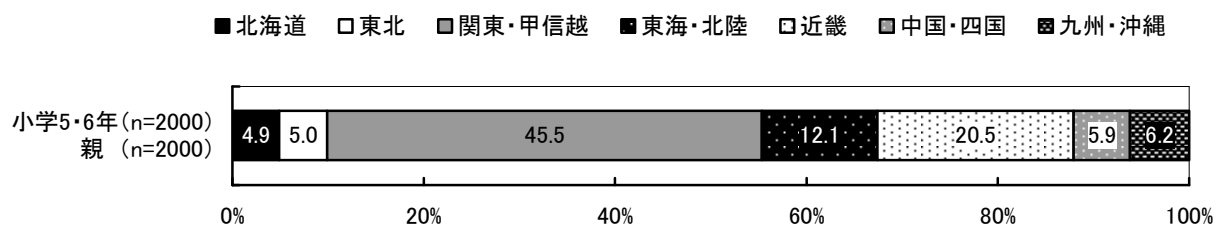
【性別・学年】



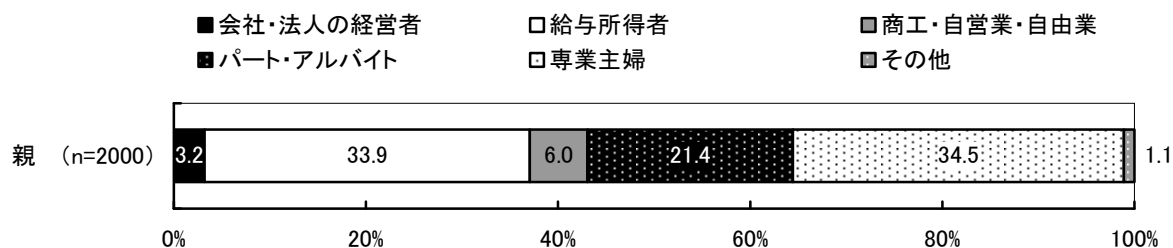
【性別・年代】



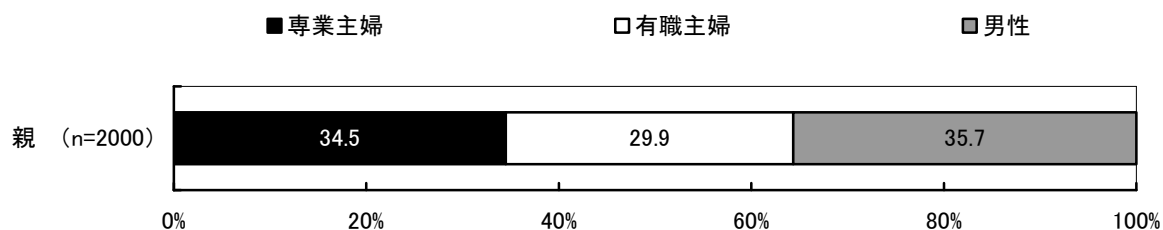
【居住地】



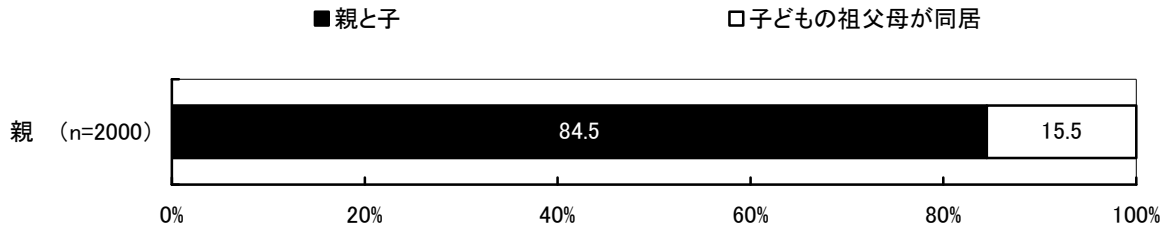
【職業】



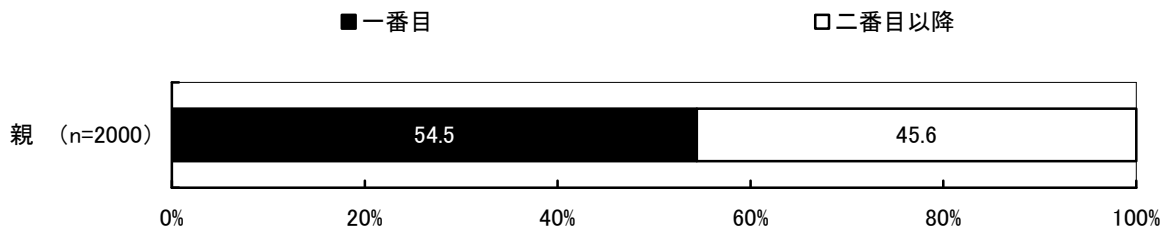
【女性(専業主婦・有職主婦)と男性】



【家族構成】



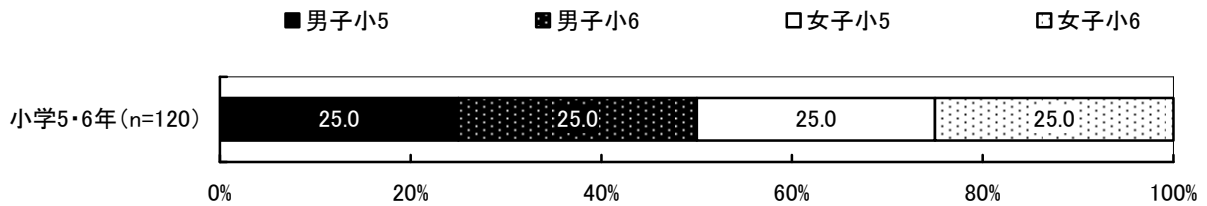
【対象の子どもは何番目か】



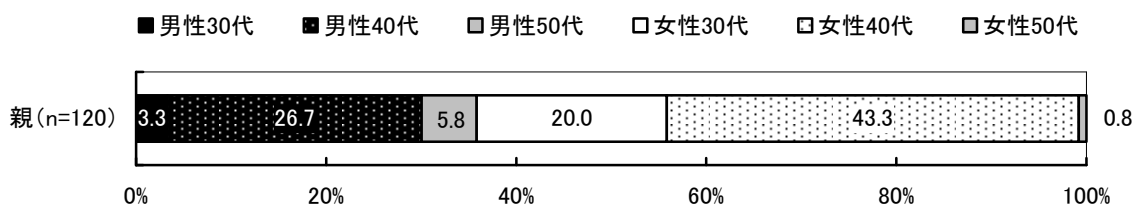
<啓発効果測定調査>

・・・意識調査の回答者を対象に実施し、小学5・6年の子ども120人、その親120人から有効回答を得た。

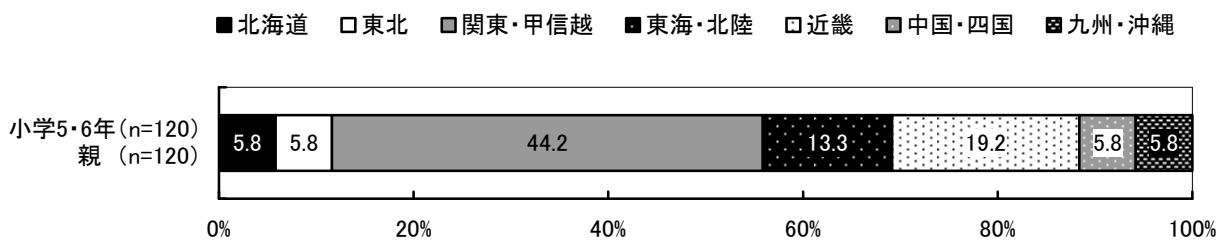
【性別・学年】



【性別・年代】



【居住地】



2. 調査結果の要約

(1) 食品安全についての、小学生と親の意識

今回の調査では、第1ステップとして、全国の小学5・6年の男女2000人とその親2000人の計4000人を対象に、食品安全についての意識調査を実施した。

親のうち、女性(=母親)が64.4%(1287人)、男性(=父親)が35.7%(713人)。1287人の母親のうち専業主婦が53.6%(690人)、有職主婦(パート・アルバイトも含む)が46.4%(597人)となっている。

家族構成では、親子のみの世帯が全体の84.5%(1690)と大半を占めており、祖父母が同居している世帯は15.5%(310人)であった。

<回答の全体傾向について>

今回の意識調査では、食品安全の意識について、明らかな親と子どもの相関がみられ、親の意識が子どもの意識にも大きく影響していることがわかった。

また、父親と母親の間で、意識や言葉の認知に明らかな違いがみられた。これは、夕食を作っているかどうか、どこで食品購入しているか、食材購入・中食・外食利用頻度等の日常の行動の違いが大きく影響しているためと思われる。

しかし、居住地による違い、専業主婦と有職主婦の違い、対象の子どもが一番目の場合と二番目以降の場合による違いについては、部分的にわずかな違いがある程度で明確な差はみられなかった。

①行動の実態

・「スーパーマーケット」の利用率は96.4%「生協」も3分の1が利用

・父親と子どもには「コンビニエンスストア」が身近

- 食品の購入先は、「スーパーマーケット」が最も多く96.4%に達している。「生協」も34.5%が利用。以下、「コンビニエンスストア」24.8%、「商店街の店」11.9%、「通信販売」5.9%となっている。一方、子どもは、「スーパーマーケット」は70.3%にとどまり、「コンビニエンスストア」が46.5%と高い。子どもにとってコンビニエンスストアはかなり身近な存在になっていることがわかる。その他は7.3%が「お菓子屋」「近所のお店」のほか、「自分では買わない」という回答があった。
- 親を男女別でみると、男性は「コンビニエンスストア」が42.4%で、女性の15.0%を大きく上回っている。

・家庭の夕食はほぼ100%「母親」が作っている

・外食シーンも“食育”の機会となりうる

- 家庭の夕食を作っているのは、「母親」が96.1%で圧倒的である。専業主婦においては99.6%とさらに上回る。
- 食材の購入や中食・外食の頻度については、親の男女別で違いがみられる。食材の購入頻度は女性が高く、外食の頻度は明らかに男性の方が高い。専業主婦と有職主婦を比較すると、有職主婦において、中食の利用頻度が専業主婦を上回っているが、食材の購入頻度や外食の頻度はほとんど差がみられない。
- 食材の購入や中食・外食の頻度が週1回以上の比率は、食材の購入が親83.2%(子7.9%)、中食が親49.5%(子10.8%)、外食が親35.6%(子18.1%)。また、親と子どもが同じ回答をした割合をみると、食材の購入頻度では1割程度、中食の利用頻度では3割弱、外食の頻度では5割強となっている。親子がともに過ごす外食のシーンも、重要な“食育”の機会になり得ると言えよう。

・半数の子どもが小学校低学年で自分の意思で食品を購入している

- 子どもの意思で食品の購入しはじめる時期について、全体では「保育園・幼稚園」(親13.6%、子11.6%)、「小学校低学年」(親33.0%、子33.1%)、「小学校中学年」(親31.0%、子32.6%)、「小学校高学年」(親14.9%、子15.7%)となっており、親子ともほぼ同様の回答となっている。なお、「買わせたことがない」(親7.2%)、「買ったことがない」(子6.3%)もわずかにあった。

②食品安全への意識

- ・自分や家族に健康被害の可能性があると不安がある
 - ・食品安全の意識は親と子どもの相関がある
-

- 食品安全の意識については、「農薬」「食品添加物」「遺伝子組換え食品」「牛海綿状脳症(BSE)」「メチル水銀」の5項目について各4問、計20問の質問をした。質問に対しては、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4段階の選択肢を提示し、肯定度合いが高い順に、4→3→2→1と点数化。回答数を掛けて平均値を算出した。
- 5つの項目のそれぞれ冒頭に「自分や家族に健康被害の可能性があると不安かどうかを質問しているが、親子ともいずれも平均値が「3」前後で肯定度合いが高くなっている。このように健康被害に対する不安を少なからずもっており、身近な問題として考えなければという意識があることが読み取れる。
- 親の男女別にみると、男性よりも女性において肯定度合いが高い傾向がみられる。
- 食品安全への意識についての質問に関しては、親と子どもが同じ回答をした割合が5割を超えるものが多く、明らかな相関がみられる。子どもの意識は親に依存するところが多いと言えよう。

③食品安全に関連する言葉の認知

- ・食品安全に関する言葉を親は「よく知らない」子どもはさらに認知度が低い
-

- 食品安全に関連する6つの言葉「ハザード」、「リスク評価」、「リスク管理」、「リスクコミュニケーション」、「リスク分析」、「食品安全委員会」について、それぞれ「よく知っている」「少し知っている」「聞いたことはあるがよく知らない」「全くわからない」の4段階の選択肢を提示し、平均値を算出した。その結果、平均値はそれぞれ「ハザード」(親 2.11、子 1.33)、「リスク評価」(親 2.26、子 1.25)、「リスク管理」(親 2.39、子 1.29)、「リスクコミュニケーション」(親 1.85、子 1.17)、「リスク分析」(親 2.15、子 1.20)、「食品安全委員会」(親 2.54、子 1.64)であった。
- 6つの言葉の中では、「食品安全委員会」が最も認知度が高く、「リスクコミュニケーション」が最も認知度が低い。ただし、いずれの言葉も「聞いたことはあるがよく知らない」というのが平均的なところと言える。いずれの言葉についても、子どもは親の認知度をさらに下回っている。
- 親の男女別では、いずれの言葉についても、認知度は男性の方が高い。但し、リスクという言葉自体が社会や組織内で話題になることが多いため、認知度として表れていることも考えられる。

④見学や問い合わせの経験

・消費者の食品安全の問い合わせ先は公の機関よりもメーカー・流通が多い

- 食品工場への見学経験は親が 50.7%、子どもが 56.9%でいずれも半数を超えていた。
- 全体の 4 分の 1 程度の親が食品安全に関する問い合わせをした経験がある。問い合わせ先は、「食品メーカー」17.8%、「流通(お店など)」が 10.4%であるのに対し、「保健所」4.6%、「厚生労働省」「農林水産省」がいずれも 0.7%、「県庁」0.5%、「検疫所」「食品安全委員会」がいずれも 0.3%と公の機関への問い合わせはきわめて少ない。消費者にとっては公の機関よりもメーカーや流通が身近な存在となっていることがわかる。
- 親に対して、「食品安全委員会の意見交換会への参加経験」を質問したが、「参加したことがある」との回答は 1 件もなかった。

(2) 啓発効果について ～ビデオ視聴後の意識の変化～

第1ステップの意識調査に続き、第2ステップではビデオを使った啓発効果測定調査を実施した。調査対象は意識調査に回答した親子各2000人、計4000人のうち、親子各120人、計240人の有効回答を集計した。

アンケートで、親が視聴したビデオは『食品安全の基礎知識 クイズで学ぶリスク評価 (約12分)』、小学生が視聴したビデオは『気になる食品の安全性 みんなで学ぼう リスク分析(約18分)』と、それぞれ異なる内容のビデオを用いたが、効果測定のための質問項目は親子共通とした。また、質問項目は意識調査の一部と共通である。

今回は、ビデオをみた親子各120人の、ビデオ視聴前とビデオ視聴後のクロス集計をもとに、意識や認知度がどのように変化したかを確認することとする。

<回答の全体傾向について>

啓発効果は、特に子どもにおける食品安全への意識において顕著となった。とりわけ「農薬」「食品添加物」が、「安全性について検討されている」、「使用基準(表示基準)等があり安全管理されている」ことについて、関心・理解が高まった。

親子ともに、「農薬」「食品添加物」「遺伝子組換え食品」のそれぞれについて、「安全性について検討されている」ことや「使用基準(表示基準)等があり安全管理されている」ことに対しては、概ね、肯定的な回答へとシフトする比率が高く、理解を深めている様子が見られる。

「農薬」「食品添加物」「遺伝子組換え食品」「牛海綿状脳症(BSE)」「メチル水銀」の全てにおいて、「安全性についての情報を知る機会がある」ことについては、肯定へシフトするだけでなく、否定へのシフトも明らかに認められた。

なお、ビデオ視聴によって言葉の認知度も確実に上がっているが、いずれの言葉についても、親のほうが子どもより認知度が高いという意識調査での傾向は、啓発効果調査の結果にも同じように表れた。「食品安全委員会」についてはビデオ視聴でさらに認知を高めた。

<図表の表記や見方について>

○P15以降の図表では、小学5・6年の子どもを「子」と表記する。

○表の見方について (P13,14,15,16,17,19)

例えば、P13の農薬では「自分や家族に健康被害の可能性がある」ことについて、ビデオ視聴前の意識調査では、親120人中104人が「思う」、16人が「思わない」と回答した。ビデオ視聴後に同様の質問を行ったところ、親120人中107人が「思う」、13人が「思わない」と回答した。

ビデオ視聴前後の回答の組合せは、**肯定・肯定(変化なし)・肯定から否定へシフト・否定から肯定へシフト・否定・否定(変化なし)の4通りとなる。ビデオ視聴による効果を検討するにあたっては、特に「肯定から否定へシフト」と「否定から肯定へシフト」に着目し、ビデオ視聴前後の変化の比率を参考に判断した。「否定から肯定へシフト」が大きいほど啓発効果が大きいといえる。また、結果の安定性を考慮するための参考としてサンプル数を併記した。**

		親 n=120	思う	思わない
			107	13
思う	視聴後→ 視聴前↓	104	97(93.3)	7(6.7)
		16	10(62.5)	6(37.5)
思わない				

単位: 人=回答者の人数、()内%=視聴前の人数に対する割合

・肯定から否定へシフト 思う(104人) → 思わない(7人) **6.7%** 表の右上枠(網掛け)
 ・否定から肯定へシフト 思わない(16人) → 思う(10人) **62.5%** 表の左下枠(墨)

農薬…特に子どもにおいて、「農薬」への関心・理解が高まった

- 農薬については、親子ともに「自分や家族に健康被害の可能性がある」という意識がもともと強いがビデオ視聴後には、さらに強くなっている。
- 「安全性について検討されている」「使用基準等があり安全管理されている」ことについては、親子ともにビデオ視聴前に「思う」と回答していたうちの 9 割以上がビデオ視聴後も「思う」と回答している。ビデオ視聴前の「思わない」と回答していたうちの、親では 6～7 割が、子どもでは 8～9 割近くが「思う」と回答し、肯定にシフトしている。特に子どもにおいて「農薬」への理解が高まったといえる。
- 一方、「安全性について情報を知る機会がある」ことについては、ビデオ視聴前後で、肯定にシフトしているのは半数以下にとどまり、逆に、否定にシフトしているのは、親では 4 割以上、子どもでも 3 割近くとなっている。

【農薬】ビデオ視聴前×ビデオ視聴後の変化（親子各 n=120）

単位：人=回答者の人数、()内%=視聴前の人数に対する割合

親 n=120			子 n=120			
	思う	思わない		そう思う	思わない	
自分や家族に健康被害の可能性がある						
	視聴後→ 視聴前↓	107	13	視聴後→ 視聴前↓	102	18
思う	104	97(93.3)	7(6.7)	94	83(88.3)	11(11.7)
思わない	16	10(62.5)	6(37.5)	26	19(73.1)	7(26.9)
安全性について検討されている						
	視聴後→ 視聴前↓	103	17	視聴後→ 視聴前↓	107	13
思う	83	77(92.8)	6(7.2)	81	74(91.4)	7(8.6)
思わない	37	26(70.3)	11(29.7)	39	33(84.6)	6(15.4)
使用基準等があり安全管理されている						
	視聴後→ 視聴前↓	98	22	視聴後→ 視聴前↓	109	11
思う	67	62(92.5)	5(7.5)	64	60(93.8)	4(6.3)
思わない	53	36(67.9)	17(32.1)	56	49(87.5)	7(12.5)
安全性について情報を知る機会がある						
	視聴後→ 視聴前↓	63	57	視聴後→ 視聴前↓	69	51
思う	61	36(59.0)	25(41.0)	42	30(71.4)	12(28.6)
思わない	59	27(45.8)	32(54.2)	78	39(50.0)	39(50.0)

4 段階の選択肢を肯定・否定の 2 区分とした。表中は略して表記。
 「そう思う」+「どちらかといえばそう思う」=思う(肯定)、「どちらかといえばそう思わない」+「そう思わない」=思わない(否定)
 否定(思わない)から肯定(思う)にシフト:各表の左下枠、肯定(思う)から否定(思わない)にシフト:各表の右上枠

食品添加物…特に子どもにおいて、「食品添加物」への関心・理解が高まった

- 食品添加物については、特に親においては「自分や家族に健康被害の可能性がある」という意識がもともと強くビデオ視聴後には、強くなっている。
- 「安全性について検討されている」「使用基準等があり安全管理されている」ことについては、親子ともにビデオ視聴前に「思う」と回答していたうちの約 9 割がビデオ視聴後も「思う」と回答している。ビデオ視聴前に、「思わない」と回答していたうちの、親では 7 割近くが、子どもでは 85%程度が「思う」と回答し、肯定にシフトしている。特に子どもにおいて「食品添加物」への理解が高まったといえる。
- 一方、「安全性について情報を知る機会がある」ことについては、ビデオ視聴前後で、肯定にシフトしているのは親では 4 割程度、子どもで 5 割強となっており、否定にシフトしているのは、親では 3 割強、子どもでも 3 割弱となっている。

【食品添加物】ビデオ視聴前×ビデオ視聴後の変化（親子各 n=120）

単位:人=回答者の人数、()内%=視聴前の人数に対する割合

		親 n=120	思う	思わない			子 n=120	そう思う	思わない
自分や家族に健康被害の可能性がある									
		視聴後→ 視聴前↓	105	15			視聴後→ 視聴前↓	97	23
思う		100	92(92.0)	8(8.0)		77	66(85.7)	11(14.3)	
思わない		20	13(65.0)	7(35.0)		43	31(72.1)	12(27.9)	
安全性について検討されている									
		視聴後→ 視聴前↓	99	21			視聴後→ 視聴前↓	106	14
思う		77	70(90.9)	7(9.1)		73	66(90.4)	7(9.6)	
思わない		43	29(67.4)	14(32.6)		47	40(85.1)	7(14.9)	
使用基準等があり安全管理されている									
		視聴後→ 視聴前↓	94	26			視聴後→ 視聴前↓	107	13
思う		62	54(87.1)	8(12.9)		65	60(92.3)	5(7.7)	
思わない		58	40(69.0)	18(31.0)		55	47(85.5)	8(14.5)	
安全性について情報を知る機会がある									
		視聴後→ 視聴前↓	62	58			視聴後→ 視聴前↓	71	49
思う		52	34(65.4)	18(34.6)		36	26(72.2)	10(27.8)	
思わない		68	28(41.2)	40(58.8)		84	45(53.6)	39(46.4)	

4段階の選択肢を肯定・否定の2区分とした。表中は略して表記。

「そう思う」+「どちらかといえばそう思う」=思う(肯定)、「どちらかといえばそう思わない」+「そう思わない」=思わない(否定)

否定(思わない)から肯定(思う)にシフト:各表の左下枠、肯定(思う)から否定(思わない)にシフト:各表の右上枠

遺伝子組換え食品…特に子どもにおいて「安全管理されている」という意識が高まった

- 遺伝子組換え食品について、「安全性について検討されている」ことについては、ビデオ視聴前に、「思う」と回答していたうちの、親では 9 割、子どもでは 85%程度が、ビデオ視聴後も「思う」と回答している。ビデオ視聴前に「思わない」と回答していたうちの、親では 6 割が、子どもでは 7 割近くが肯定にシフトしている。また、「表示基準等があり安全管理されている」ことについては、ビデオ視聴前に「思わない」と回答していたうちの、親では 5 割が、子どもでは 7 割が「思う」と回答し、肯定にシフトしている。ビデオでは遺伝子組換え食品についてはほとんど解説されていないが、子どもにおいて「遺伝子組換え食品」が「表示基準等があり安全管理されている」ものとして関心度を高めている。
- 一方、「安全性について情報を知る機会がある」ことについては、親子ともに、それぞれビデオ視聴前後で、肯定にシフトと否定にシフトがほぼ同率に見られる。

【遺伝子組換え食品】ビデオ視聴前×ビデオ視聴後の変化（親子各 n=120）

単位：人=回答者の人数、()内%=視聴前の人数に対する割合

親 n=120	思う	思わない	子 n=120	そう思う	思わない
---------	----	------	---------	------	------

自分や家族に健康被害の可能性がある

	視聴後→ 視聴前↓	親 n=120		子 n=120	
		思う	思わない	そう思う	思わない
思う	84	80(95.2)	4(4.8)	68	58(85.3) 10(14.7)
思わない	36	21(58.3)	15(41.7)	52	31(59.6) 21(40.4)

安全性について検討されている

	視聴後→ 視聴前↓	親 n=120		子 n=120	
		思う	思わない	そう思う	思わない
思う	61	55(90.2)	6(9.8)	68	58(85.3) 10(14.7)
思わない	59	36(61.0)	23(39.0)	52	35(67.3) 17(32.7)

表示基準等があり安全管理されている

	視聴後→ 視聴前↓	親 n=120		子 n=120	
		思う	思わない	そう思う	思わない
思う	56	47(83.9)	9(16.1)	58	47(81.0) 11(19.0)
思わない	64	33(51.6)	31(48.4)	62	44(71.0) 18(29.0)

安全性について情報を知る機会がある

	視聴後→ 視聴前↓	親 n=120		子 n=120	
		思う	思わない	そう思う	思わない
思う	37	25(67.6)	12(32.4)	33	19(57.6) 14(42.4)
思わない	83	31(37.3)	52(62.7)	87	37(42.5) 50(57.5)

4 段階の選択肢を肯定・否定の 2 区分とした。表中は略して表記。

「そう思う」+「どちらかといえばそう思う」=思う(肯定)、「どちらかといえばそう思わない」+「そう思わない」=思わない(否定)

否定(思わない)から肯定(思う)にシフト:各表の左下枠、肯定(思う)から否定(思わない)にシフト:各表の右上枠

牛海綿状脳症(BSE)・・・意識の変化の幅は比較的少ない

- 牛海綿状脳症(BSE)については、特に親において「自分や家族に健康被害の可能性はある」という意識がもともと強く、ビデオ視聴後にそれほど大きな意識の変化はみられない。
- 牛海綿状脳症(BSE)についての4つの質問項目のなかで、「安全性について検討されている」ことについては、子どもにおいては比較的肯定へのシフト率が高い。
- とはいえ、「どのように安全管理されているか知っている」「安全性について情報を知る機会がある」については、親子とも、肯定へのシフト、否定へのシフトがいずれも3~4割強の範囲で分散している。

【牛海綿状脳症(BSE)】ビデオ視聴前×ビデオ視聴後の変化（親子各 n=120）

単位:人=回答者の人数、()内%=視聴前の人数に対する割合

親 n=120	思う	思わない	子 n=120	そう思う	思わない
---------	----	------	---------	------	------

自分や家族に健康被害の可能性はある

		視聴後→ 視聴前↓			視聴後→ 視聴前↓		
思う	100	92(92.0)	8(8.0)	82	72(87.8)	10(12.2)	
	20	9(45.0)	11(55.0)		38	20(52.6)	18(47.4)
思わない	101	19		92	28		
	19				82		

安全性について検討されている

		視聴後→ 視聴前↓			視聴後→ 視聴前↓		
思う	79	68(86.1)	11(13.9)	65	53(81.5)	12(18.5)	
	41	20(48.8)	21(51.2)		55	36(65.5)	19(34.5)
思わない	88	32		89	31		
	32				65		

どのように安全管理されているか知っている

		視聴後→ 視聴前↓			視聴後→ 視聴前↓		
思う	57	39(68.4)	18(31.6)	26	15(57.7)	11(42.3)	
	63	29(46.0)	34(54.0)		94	39(41.5)	55(58.5)
思わない	68	52		54	66		
	52				26		

安全性について情報を知る機会がある

		視聴後→ 視聴前↓			視聴後→ 視聴前↓		
思う	46	27(58.7)	19(41.3)	24	15(62.5)	9(37.5)	
	74	26(35.1)	48(64.9)		96	37(38.5)	59(61.5)
思わない	53	67		52	68		
	67				24		

4段階の選択肢を肯定・否定の2区分とした。表中は略して表記。

「そう思う」+「どちらかといえばそう思う」=思う(肯定)、「どちらかといえばそう思わない」+「そう思わない」=思わない(否定)

否定(思わない)から肯定(思う)にシフト:各表の左下枠、肯定(思う)から否定(思わない)にシフト:各表の右上枠

メチル水銀・・・親子とも、「安全性について情報を知る機会がある」ことへの意識が弱い

- メチル水銀については、特に親において「自分や家族に健康被害の可能性はある」という意識がもともと強いがビデオ視聴後には、さらに強くなっている。
- メチル水銀についての4つの質問項目のなかでは、「安全性について検討されている」ことについては、ビデオ視聴後の肯定へのシフトが比較的大きい。
- 「どのように安全管理されているか知っている」「安全性について情報を知る機会がある」については、ビデオ視聴前後でいずれも「思わない」と回答している比率が親子とも約6~7割と大きい。特に「安全性について情報を知る機会がある」ことについては、親子とも明らかに、「思う」から「思わない」とする否定へのシフトのほうが、肯定へのシフトを上回っている。

【メチル水銀】ビデオ視聴前×ビデオ視聴後の変化（親子各 n=120）

単位:人=回答者の人数、()内%=視聴前の人数に対する割合

		親 n=120	思う	思わない			子 n=120	そう思う	思わない
自分や家族に健康被害の可能性はある									
		視聴後→ 視聴前↓	102	18			視聴後→ 視聴前↓	92	28
思う		94	87(92.6)	7(7.4)			80	70(87.5)	10(12.5)
思わない		26	15(57.7)	11(42.3)			40	22(55.0)	18(45.0)
安全性について検討されている									
		視聴後→ 視聴前↓	90	30			視聴後→ 視聴前↓	94	26
思う		51	44(86.3)	7(13.7)			49	42(85.7)	7(14.3)
思わない		69	46(66.7)	23(33.3)			71	52(73.2)	19(26.8)
どのように安全管理されているか知っている									
		視聴後→ 視聴前↓	53	67			視聴後→ 視聴前↓	56	64
思う		31	21(67.7)	10(32.3)			27	17(63.0)	10(37.0)
思わない		89	32(36.0)	57(64.0)			93	39(41.9)	54(58.1)
安全性について情報を知る機会がある									
		視聴後→ 視聴前↓	46	74			視聴後→ 視聴前↓	47	73
思う		30	18(60.0)	12(40.0)			25	13(52.0)	12(48.0)
思わない		90	28(31.1)	62(68.9)			95	34(35.8)	61(64.2)

4段階の選択肢を肯定・否定の2区分とした。表中は略して表記。
 「そう思う」+「どちらかといえばそう思う」=思う(肯定)、「どちらかといえばそう思わない」+「そう思わない」=思わない(否定)
 否定(思わない)から肯定(思う)にシフト:各表の左下枠、肯定(思う)から否定(思わない)にシフト:各表の右上枠

「食品安全委員会」はビデオ視聴でさらに認知度を高めた

- ビデオ視聴によっていずれの言葉の認知度も確実に上がっている。
- いずれの言葉についても、意識調査の時点で、親のほうが子どもより認知度が高いという意識調査での傾向は、啓発効果調査の結果にも同じように表れた。
- 子どもにおいては意識調査の時点ではいずれの言葉についてもほとんど認知していなかっただけに、「知っている」に移行した実数は親に比べ格段に多い。ただし、肯定へのシフトの比率は、「リスク評価」「リスク管理」「リスクコミュニケーション」「リスク分析」においては、親のほうが大きく表れている。
- 親において、ビデオ視聴後に認知度が7割を超えたのは「リスク評価」のみであり、「リスク管理」「リスク分析」はいずれも7割を下回り、「リスクコミュニケーション」は5割にとどまっている。子どもにおいては、それぞれ4割前後の認知度であった。
- ビデオ視聴前後の「食品安全委員会」の認知度の変化をみると、親は5割強から7割へ、子どもでは1割強から6割近くへと、その認知度を高めている。

【言葉の認知】ビデオ視聴前×ビデオ視聴後の変化（親子各 n=120）

単位：人=回答者の人数、（ ）内%=視聴前の人数に対する割合

		親 n=120		子 n=120	
		知っている	知らない	知っている	知らない
ハザード	視聴後→ 視聴前↓	54	66	26	94
	知っている	46	40(87.0)	7	5(71.4)
	知らない	74	14(18.9)	113	24(21.2)

		親 n=120		子 n=120	
		知っている	知らない	知っている	知らない
リスク評価	視聴後→ 視聴前↓	85	35	49	71
	知っている	54	46(85.2)	7	4(57.1)
	知らない	66	39(59.1)	113	46(40.7)

		親 n=120		子 n=120	
		知っている	知らない	知っている	知らない
リスク管理	視聴後→ 視聴前↓	82	38	52	68
	知っている	58	50(86.2)	9	3(33.3)
	知らない	62	32(51.6)	111	46(41.4)

		親 n=120		子 n=120	
		知っている	知らない	知っている	知らない
リスクコミュニケーション	視聴後→ 視聴前↓	60	60	46	74
	知っている	27	20(74.1)	4	2(50.0)
	知らない	93	40(43.0)	116	44(37.9)

		親 n=120		子 n=120	
		知っている	知らない	知っている	知らない
リスク分析	視聴後→ 視聴前↓	78	42	46	74
	知っている	50	45(90.0)	6	3(50.0)
	知らない	70	33(47.1)	114	43(37.7)

		親 n=120		子 n=120	
		知っている	知らない	知っている	知らない
食品安全委員会	視聴後→ 視聴前↓	84	36	70	50
	知っている	65	55(84.6)	17	6(35.3)
	知らない	55	29(52.7)	103	59(57.3)

4段階の選択肢を肯定・否定の2区分とした。表中は略して表記。
 「よく知っている」「少し知っている」=知っている(肯定)、「聞いたことはあるがよく知らない」+「全く知らない」=知らない(否定)
 否定(知らない)から肯定(知っている)にシフト:各表の左下枠、肯定(知らない)から否定(知っている)にシフト:各表の右上枠

(3) 明らかになった課題

ビデオによる啓発効果測定調査では、小学 5・6 年の子どもとその親の食品安全への意識や言葉の認知が明らかに高まったことが確認された。

啓発効果は、特に子どもにおける食品安全への意識において顕著となった。とりわけ「農薬」「食品添加物」が、「安全性について検討されている」、「使用基準(表示基準)等があり安全管理されている」ことについて、関心・理解が高まったと言える。

親子ともに、「農薬」「食品添加物」「遺伝子組換え食品」のそれぞれについて、「安全性について検討されている」ことや「使用基準(表示基準)等があり安全管理されている」ことに対しては、概ね、肯定的な回答へとシフトする比率が高く、理解を深めている様子が見える。

しかし、「農薬」「食品添加物」「遺伝子組換え食品」のほか、「牛海綿状脳症(BSE)」「メチル水銀」についても、「安全性についての情報を知る機会がある」ことについては、肯定へシフトするだけでなく、否定へのシフトも明らかに認められた。これは、回答者それぞれが情報を知る機会としてイメージしていたものと、ビデオから感じた情報を知る機会とのイメージのギャップがあるためと思われる。

食品安全に関する言葉について、ビデオ視聴前の意識調査の時点では、親はいずれの言葉も「聞いたことはあるがよく知らない」という程度であり、子どもにおいては、ほとんど認知されていなかった。しかし、ビデオを視聴することによって、「リスク管理」「リスク分析」「リスク評価」、さらに事前の意識調査で親子ともに最も認知度の低かった「リスクコミュニケーション」も確実に認知度が上がった。

とはいえ、親において、ビデオ視聴後に認知度が 7 割を超えたのは「リスク評価」のみであり、「リスク管理」「リスク分析」はいずれも 7 割を下回り、「リスクコミュニケーション」は 5 割にとどまっている。子どもにおいては、それぞれ 4 割前後の認知度であった。これらの言葉については、単独の言葉としてではなく、相互の関係を含めてわかりやすく示すためのさらなる工夫が求められよう。

なお、「食品安全委員会」という言葉について、意識調査の時点でも上記の言葉よりは認知度が高かったが、ビデオ視聴でさらにアップし、「よく知っている」と「少し知っている」を合わせると、親は 5 割強から 7 割に、子どもは 1 割強から 6 割に近づき、ビデオの啓発効果が発揮されたと言える。ビデオでは、食品安全委員会を含めた公的機関の役割や連携、取り組みの様子が、大人用、小学生用にそれぞれ紹介された。小学生用のビデオでは、ドラマ仕立てとなっていたこともあり、子どもたちの注意を引き寄せ、繰り返し使われた「食品安全委員会」や「リスク」という言葉が記憶され、調査結果に反映したと思われる。

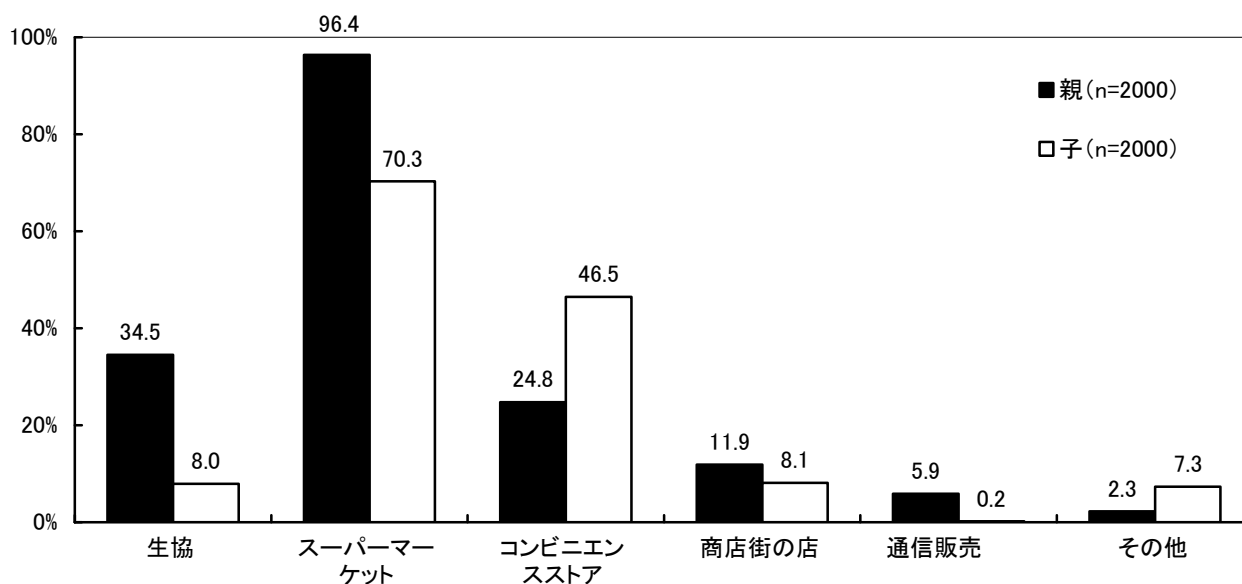
事前の意識調査では、食品安全への意識については明らかな親と子どもの相関が見られ、親の意識が子どもの意識にも大きく影響することが確認された。また、家庭の夕食を作っているのは 100% 近く母親であること、半数の子どもは、小学校低学年には自分の意思で食品購入をしていること、「コンビニエンスストア」が身近な存在となっていること、外食の頻度は、食材の購入や中食の利用の頻度を上回っていることがわかった。このような実態を踏まえつつ、小学生とその親に対して、食品安全について知る具体的な機会を数多く、継続的に提供されることが重要であると言える。

Ⅱ. アンケート集計結果のまとめ

1. 意識調査

Q1. あなたは食品をどこでよく購入していますか？(複数選択可)

※図表では小学5・6年の子どもを「子」と表記。以下同様。



親の食品の購入先は、「スーパーマーケット」が最も多く 96.4%に達している。「生協」も 34.5%が利用。以下、「コンビニエンスストア」24.8%、「商店街の店」11.9%、「通信販売」5.9%となっている。一方、子どもは、「スーパーマーケット」は 70.3%にとどまり、「コンビニエンスストア」が 46.5%と高い。子どもにとってコンビニエンスストアはかなり身近な存在になっていることがわかる。「その他」は 7.3%で「お菓子屋」「近所のお店」のほか「自分では買わない」という回答も含まれている。

親を男女別でみると、男性は「コンビニエンスストア」が 42.4%で女性の 15.0%を大きく上回っている。

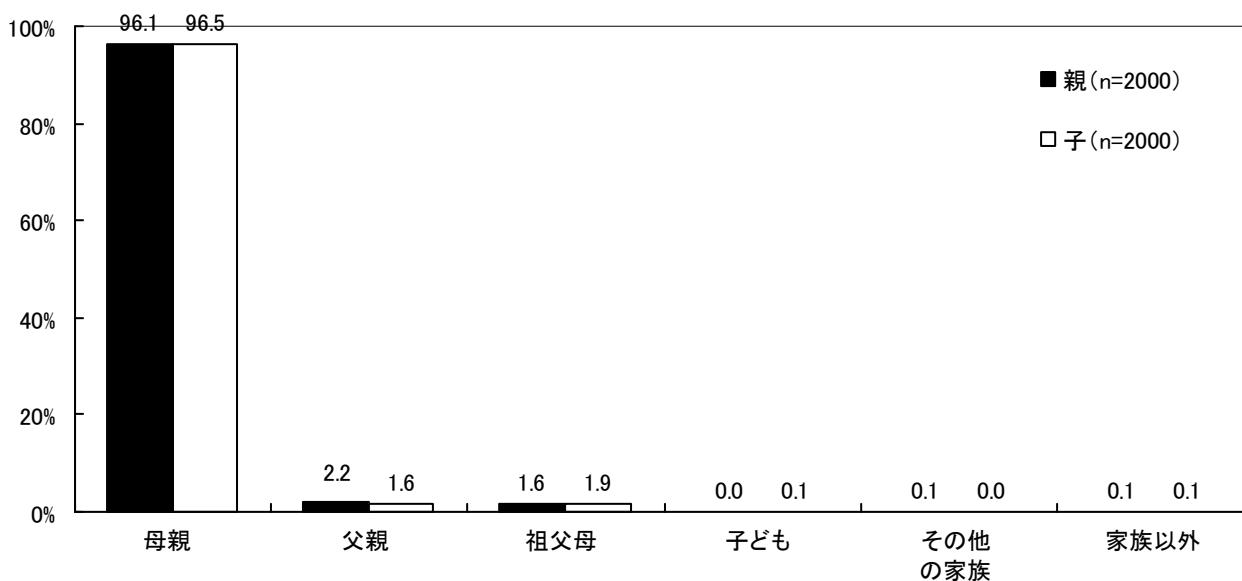
【親子】

	生協	スーパーマーケット	コンビニエンスストア	商店街の店	通信販売	その他
親 (n=2000)	34.5	96.4	24.8	11.9	5.9	2.3
子 (n=2000)	8.0	70.3	46.5	8.1	0.2	7.3

【親・男女】

	生協	スーパーマーケット	コンビニエンスストア	商店街の店	通信販売	その他
親 (n=2000)	34.5	96.4	24.8	11.9	5.9	2.3
男性 (n= 713)	20.6	93.5	42.4	10.8	5.8	1.8
女性 (n=1287)	42.2	97.9	15.0	12.4	6.0	2.5

Q2. ご家庭の夕食は主に誰が作りますか？



家庭の夕食を作っているのは、「母親」が 96.1% で圧倒的である。親と子が同じ回答をした割合は 98.6% である。

【親子】

	母親	父親	祖父母	子ども	その他の家族	家族以外
親 (n=2000)	96.1	2.2	1.6	0.0	0.1	0.1
子 (n=2000)	96.5	1.6	1.9	0.1	0.0	0.1

【親・男女】

	母親	父親	祖父母	子ども	その他の家族	家族以外
親 (n=2000)	96.1	2.2	1.6	0.0	0.1	0.1
男性 (n= 713)	92.1	5.5	2.0	0.0	0.3	0.1
女性 (n=1287)	98.3	0.3	1.3	0.0	0.0	0.1

注:

「Q2.ご家庭の夕食は主に誰が作りますか？」に対する親の選択肢と回答は以下のとおり。

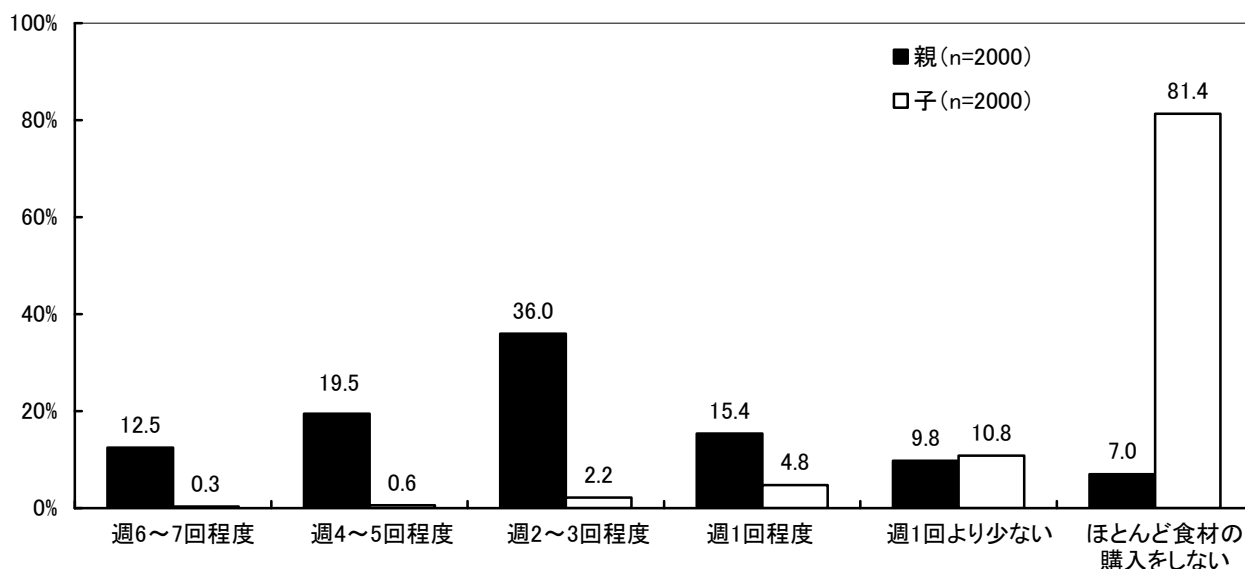
親子の回答結果を比較するため、再集計を行い、「自分自身・配偶者」を「母親・父親」に置き換えた。

	自分自身	配偶者	祖父母(子どもにとって)	子ども	その他の家族	家族以外
親 (n=2000)	65.2	33.1	1.6	0.0	0.1	0.1
男性 (n= 713)	5.5	92.1	2.0	0.0	0.3	0.1
女性 (n=1287)	98.3	0.3	1.3	0.0	0.0	0.1

Q3. あなたは食材の購入、総菜・中食・弁当の利用、外食をどのくらいしていますか？

(自分では食材を買ったり、そうざいや弁当を利用したり、外食をどのくらいしていますか？)

Q3-A. 食材の購入



食材の購入頻度は、親では「週2~3回程度」が最も多く36.0%となっている。

親を男女別で比較すると、女性では週2回以上が89.2%で9割を占めるのに対し、男性は29.2%と3割に満たない。このように母親と父親には大きな差がみられる。

一方、子どもについては、「ほとんど食材の購入をしない」が81.4%となっている。

親と子が同じ回答をした割合は10.4%である。

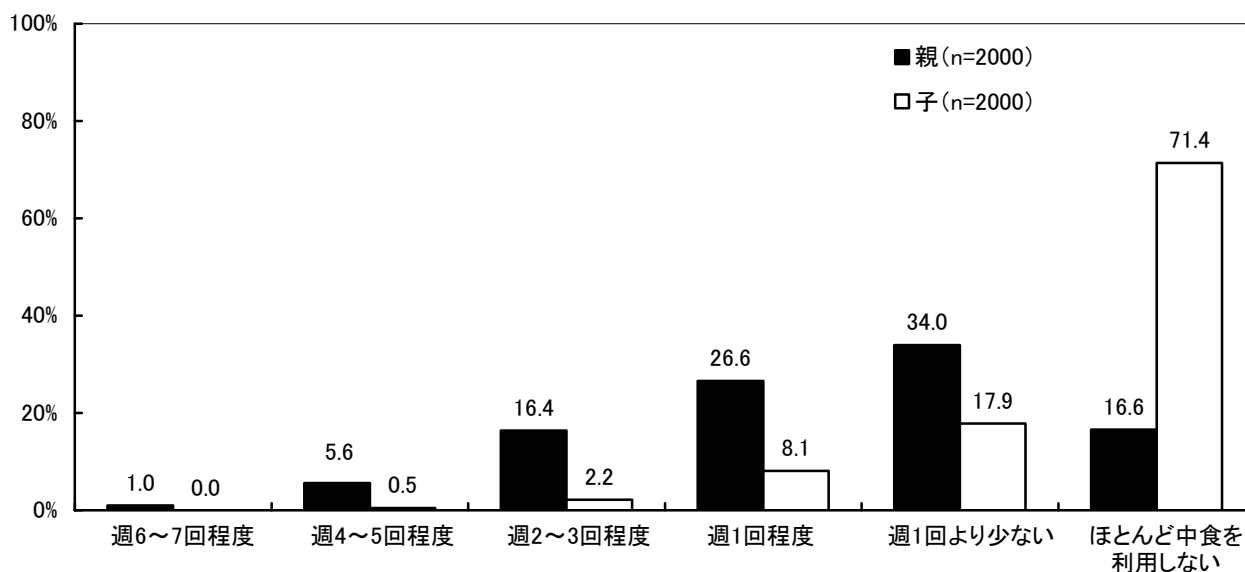
【親子】

	週6~7回程度	週4~5回程度	週2~3回程度	週1回程度	週1回より少ない	ほとんど食材の購入をしない
親 (n=2000)	12.5	19.5	36.0	15.4	9.8	7.0
子 (n=2000)	0.3	0.6	2.2	4.8	10.8	81.4

【親・男女】

	週6~7回程度	週4~5回程度	週2~3回程度	週1回程度	週1回より少ない	ほとんど食材の購入をしない
親 (n=2000)	12.5	19.5	36.0	15.4	9.8	7.0
男性 (n= 713)	2.2	5.3	21.7	30.9	21.2	18.7
女性 (n=1287)	18.1	27.3	43.8	6.8	3.5	0.5

Q3-B. 中食



中食の利用頻度については、「ほとんど中食を利用しない」とする親が 16.6%、子どもでは 71.4%と親子間で大きな差がみられる。この差には、子どもが「中食」の意味を理解しないまま回答している、あるいは、親が購入した「中食」を子どもが「中食」と認識しないまま利用しているということも推測される。

親と子が同じ回答をした割合は 27.6%である。

親を男女別で比較すると、「週 1 回より少ない」「週 1 回程度」をあわせた週 1 回以下利用の範囲に女性の 66.9%が集中し、週 2 回以上が 17.5%であるのに対し、男性は、週 1 回以下は 48.9%にとどまり、週 2 回以上が 32.8%となっている。男性のほうが頻繁に中食を利用しているといえる。

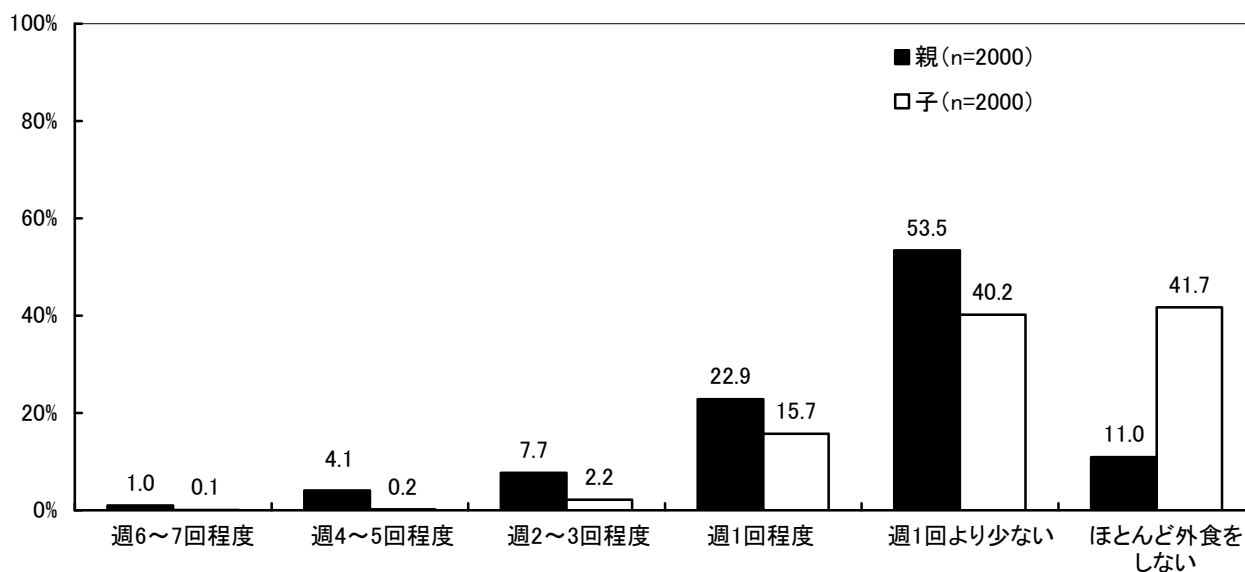
【親子】

	週 6~7 回程度	週 4~5 回程度	週 2~3 回程度	週 1 回程度	週 1 回より少ない	ほとんど中食を利用しない
親 (n=2000)	1.0	5.6	16.4	26.6	34.0	16.6
子 (n=2000)	0.0	0.5	2.2	8.1	17.9	71.4

【親・男女】

	週 6~7 回程度	週 4~5 回程度	週 2~3 回程度	週 1 回程度	週 1 回より少ない	ほとんど中食を利用しない
親 (n=2000)	1.0	5.6	16.4	26.6	34.0	16.6
男性 (n= 713)	2.1	11.5	19.2	21.6	27.3	18.2
女性 (n=1287)	0.4	2.3	14.8	29.3	37.6	15.6

Q3-C. 外食



外食の頻度は、親では「週1回より少ない」が53.5%で最も多い。週2回以上は12.8%、週1回以上では35.6%となっている。男女別では、週2回以上が男性26.6%、女性5.0%、週1回以上が、男性48.5%、女性28.4%というように、明らかに男性の外食頻度のほうが高くなっている。

外食の頻度の親と子が同じ回答をした割合は51.7%で、食材購入の10.4%、中食の27.6%と比べ高くなっている。

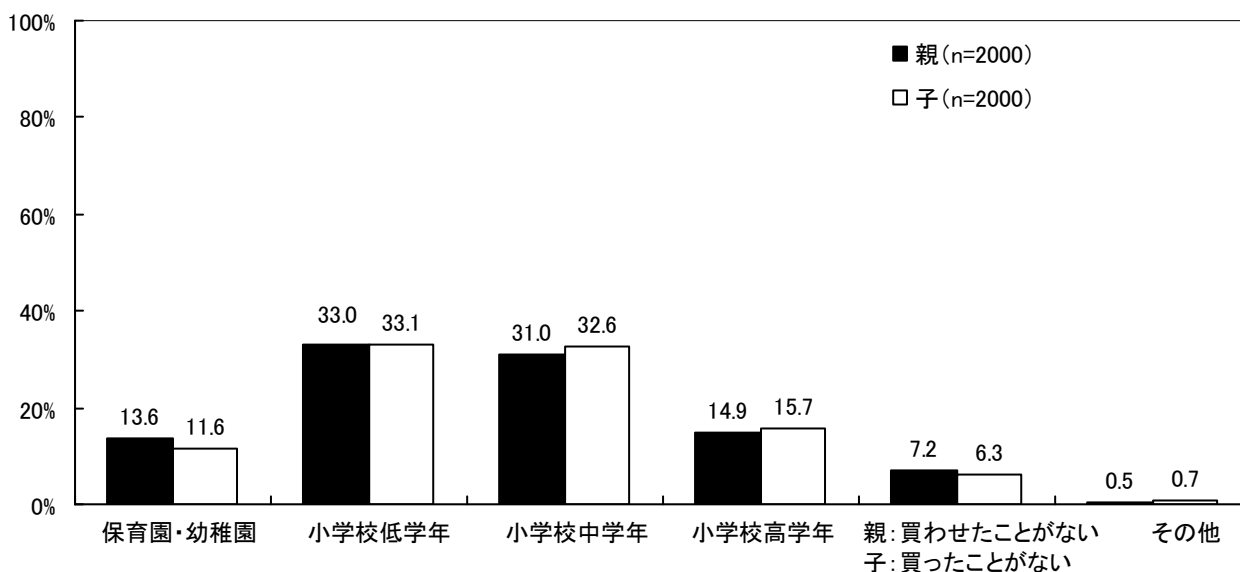
【親子】

	週6~7回程度	週4~5回程度	週2~3回程度	週1回程度	週1回より少ない	ほとんど外食をしない
親 (n=2000)	1.0	4.1	7.7	22.9	53.5	11.0
子 (n=2000)	0.1	0.2	2.2	15.7	40.2	41.7

【親・男女】

	週6~7回程度	週4~5回程度	週2~3回程度	週1回程度	週1回より少ない	ほとんど外食をしない
親 (n=2000)	1.0	4.1	7.7	22.9	53.5	11.0
男性 (n=713)	2.2	10.9	13.5	21.9	42.4	9.1
女性 (n=1287)	0.3	0.2	4.5	23.4	59.6	12.0

Q4. 小学校5, 6年生のお子さんはいつごろから自分の意思でお菓子などをかうようになりましたか？
 (※あなたはいつごろから自分でお菓子などをかうようになりましたか？)



子どもの意思での食品購入の時期については、全体では「保育園・幼稚園」(親 13.6%、子 11.6%)、「小学校低学年」(親 33.0%、子 33.1%)、「小学校中学年」(親 31.0%、子 32.6%)、「小学校高学年」(親 14.9%、子 15.7%)となっており、親子ともほぼ同様の回答となっている。なお、「買わせたことがない」(親 7.2%)、「買ったことがない」(子 6.3%)もわずかにあった。親と子が同じ回答をした割合は 87.0%である。このように、半数の子どもが、小学校低学年には自分の意識食品購入をしている。

【親子】

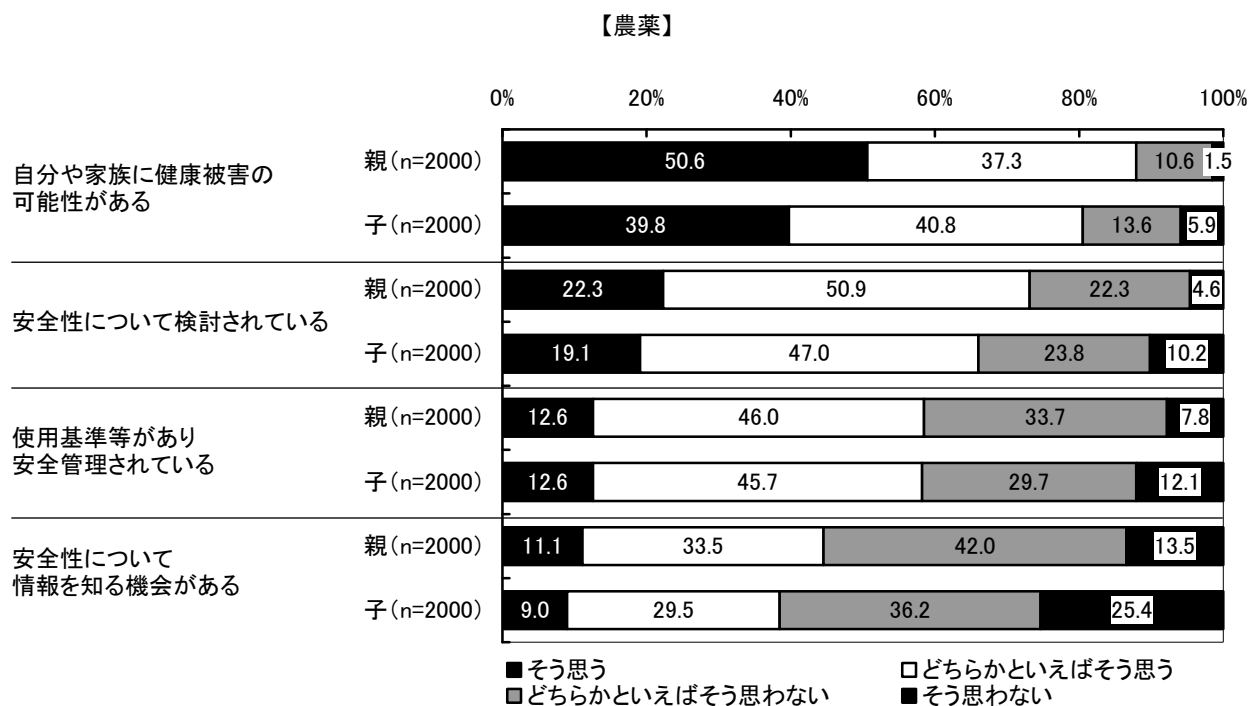
	保育園・幼稚園	小学校低学年	小学校中学年	小学校高学年	親:買わせたことがない 子:買ったことがない	その他
親 (n=2000)	13.6	33.0	31.0	14.9	7.2	0.5
子 (n=2000)	11.6	33.1	32.6	15.7	6.3	0.7

【親・男女】

	保育園・幼稚園	小学校低学年	小学校中学年	小学校高学年	買わせたことがない	その他
親 (n=2000)	13.6	33.0	31.0	14.9	7.2	0.5
男性 (n= 713)	10.0	35.3	33.2	12.9	8.3	0.3
女性 (n=1287)	15.5	31.6	29.8	15.9	6.6	0.5

Q5. 食品や農産物に関する次のものについて、あなたはどのように思いますか？

Q5-A. 農薬(野菜などの農産物をつくるときに使う薬)



農薬は「自分や家族に健康被害の可能性はある」と、親の 87.9%、子どもの 80.6% が意識している。「安全性について検討されている」「使用基準等があり安全管理されている」ことについては、親子とも半数が「どちらかといえばそう思う」と回答している。

「安全性について知る機会がある」ことについては、「そう思う」と「どちらかと思う」を合わせて、親子とも半数以下にとどまっている。

平均からもわかるように、4 つの質問のいずれに対しても、親のほうが子どもより、意識している度合いが高い。男女別では、女性のほうが男性より、意識している度合いがわずかに高い。

農薬についての、4 つの質問の親と子が同じ回答をした割合は以下のとおりである。

- ・ 「自分や家族に健康被害の可能性はある」 55.8%
- ・ 「安全性について検討されている」 48.3%
- ・ 「使用基準等があり安全管理されている」 48.6%
- ・ 「安全性について情報を知る機会がある」 46.4%

Q5-A. 農薬(野菜などの農産物をつくる時に使う薬)

【親子】

	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない	平均
--	------	------------------	--------------------	--------	----

自分や家族に健康被害の可能性がある

親(n=2000)	50.6	37.3	10.6	1.5	3.37
子(n=2000)	39.8	40.8	13.6	5.9	3.14

安全性について検討されている

親(n=2000)	22.3	50.9	22.3	4.6	2.91
子(n=2000)	19.1	47.0	23.8	10.2	2.75

使用基準等があり安全管理されている

親(n=2000)	12.6	46.0	33.7	7.8	2.63
子(n=2000)	12.6	45.7	29.7	12.1	2.59

安全性について情報を知る機会がある

親(n=2000)	11.1	33.5	42.0	13.5	2.42
子(n=2000)	9.0	29.5	36.2	25.4	2.22

【親・男女】

	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない	平均
--	------	------------------	--------------------	--------	----

自分や家族に健康被害の可能性がある

男性(n= 713)	46.0	39.0	12.8	2.2	3.29
女性(n=1287)	53.1	36.4	9.4	1.1	3.42

安全性について検討されている

男性(n= 713)	19.9	49.8	24.8	5.5	2.84
女性(n=1287)	23.6	51.4	20.8	4.1	2.95

使用基準等があり安全管理されている

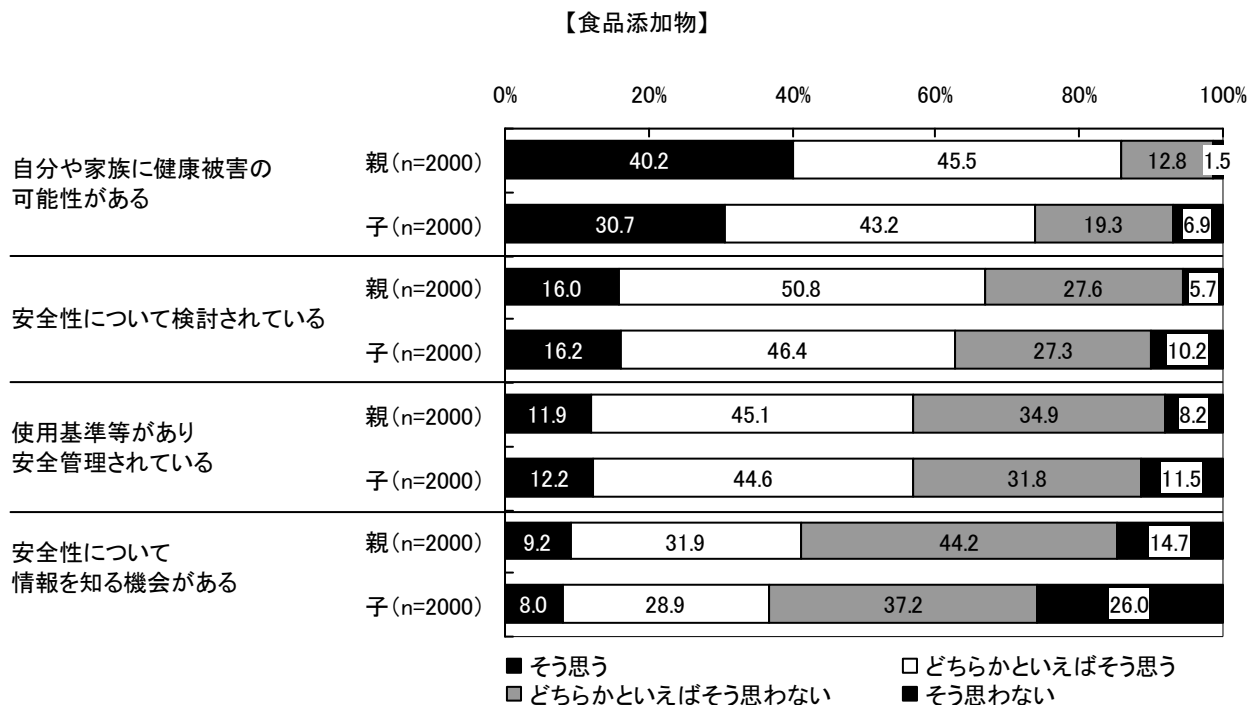
男性(n= 713)	11.9	44.6	33.8	9.7	2.59
女性(n=1287)	12.9	46.7	33.6	6.8	2.66

安全性について情報を知る機会がある

男性(n= 713)	8.8	33.0	43.1	15.1	2.35
女性(n=1287)	12.4	33.7	41.4	12.5	2.46

「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4段階で肯定度合いが高い順に、4→3→2→1と点数化し、回答数を掛けて平均値を算出。

Q5-B. 食品添加物(食べ物を作ったり、加工したり、保存するときに使う調味料、保存料、着色料など)



食品添加物は「自分や家族に健康被害の可能性があると、親の85.7%、子どもの73.9%が意識している。

「安全性について検討されている」「使用基準等があり安全管理されている」ことについては、親子とも半数が「どちらかといえばそう思う」と回答している。

「安全性について知る機会がある」ことについては、「そう思う」と「どちらかと思う」を合わせて、親子とも4割前後にとどまっている。

平均からもわかるように、4つの質問のいずれに対しても、親のほうが子どもより、意識している度合いが高い。男女別では、女性のほうが男性より、意識している度合いがわずかに高い。

食品添加物についての、4つの質問の親と子が同じ回答をした割合は以下のとおりである。

- ・ 「自分や家族に健康被害の可能性があると」 53.1%
- ・ 「安全性について検討されている」 49.5%
- ・ 「使用基準等があり安全管理されている」 48.7%
- ・ 「安全性について情報を知る機会がある」 47.8%

Q5-B. 食品添加物(食べ物を作ったり、加工したり、保存するときに使う調味料、保存料、着色料など)

【親子】

	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない	平均
--	------	------------------	--------------------	--------	----

自分や家族に健康被害の可能性がある

親(n=2000)	40.2	45.5	12.8	1.5	3.24
子(n=2000)	30.7	43.2	19.3	6.9	2.98

安全性について検討されている

親(n=2000)	16.0	50.8	27.6	5.7	2.77
子(n=2000)	16.2	46.4	27.3	10.2	2.69

使用基準等があり安全管理されている

親(n=2000)	11.9	45.1	34.9	8.2	2.61
子(n=2000)	12.2	44.6	31.8	11.5	2.57

安全性について情報を知る機会がある

親(n=2000)	9.2	31.9	44.2	14.7	2.36
子(n=2000)	8.0	28.9	37.2	26.0	2.19

【親・男女】

	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない	平均
--	------	------------------	--------------------	--------	----

自分や家族に健康被害の可能性がある

男性(n= 713)	36.2	44.5	16.4	2.9	3.14
女性(n=1287)	42.4	46.1	10.8	0.7	3.30

安全性について検討されている

男性(n= 713)	16.0	48.9	27.5	7.6	2.73
女性(n=1287)	16.0	51.8	27.6	4.6	2.79

使用基準等があり安全管理されている

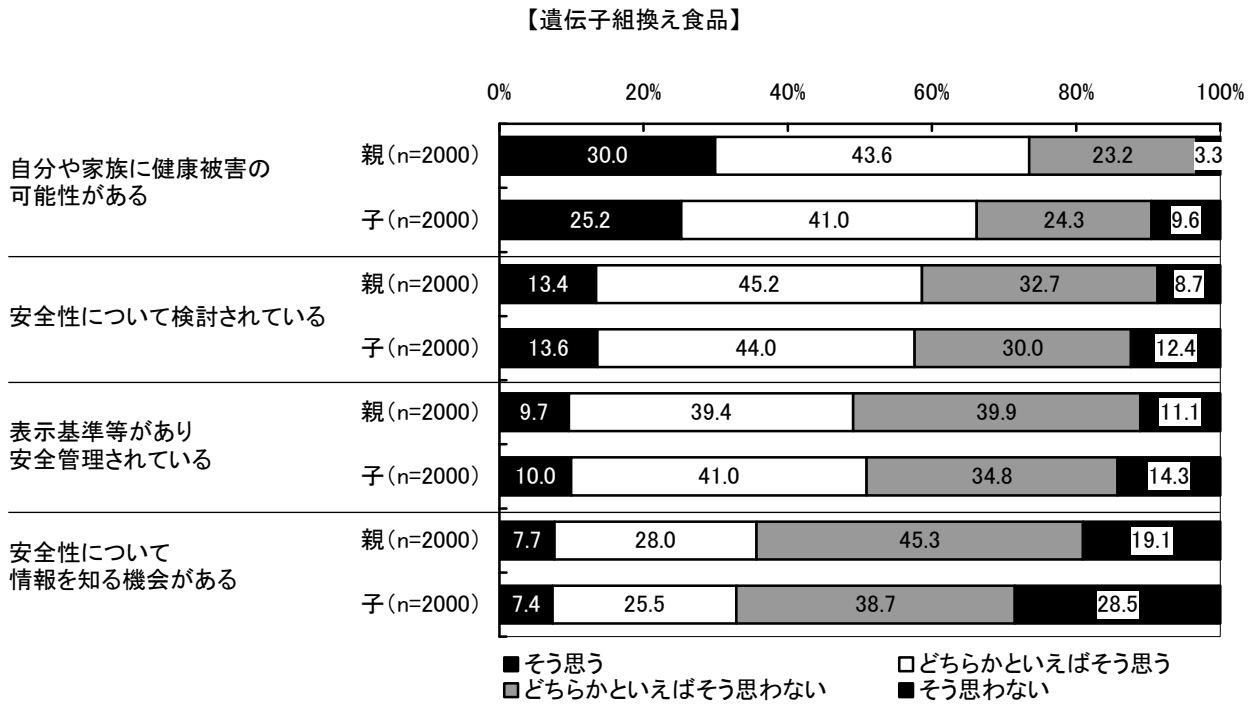
男性(n= 713)	12.2	44.0	33.5	10.2	2.58
女性(n=1287)	11.7	45.6	35.7	7.1	2.62

安全性について情報を知る機会がある

男性(n= 713)	7.6	31.4	44.6	16.4	2.30
女性(n=1287)	10.1	32.2	44.0	13.8	2.39

「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4段階で肯定度合いが高い順に、4→3→2→1と点数化し、回答数を掛けて平均値を算出。

Q5-C. 遺伝子組換え食品(別の生物の遺伝子に組換えたりする技術を用いて開発された食品)



遺伝子組換え食品は「自分や家族に健康被害の可能性はある」と、親の 73.6%、子どもの 66.2%が意識している。

「安全性について検討されている」ことについては、親子とも「どちらかといえばそう思う」との回答が最も多い。

「表示基準等があり安全管理されている」ことについて、親子とも肯定派と否定派はほぼ半数ずつとなっている。

「安全性について情報を知る機会がある」ことについては、「そう思う」と「どちらかと思う」を合わせて、親では 35.7%、子どもでは 32.9%にとどまっている。

平均からもわかるように、4つの質問のいずれに対しても、親のほうが子どもより、意識している度合いが高い。男女別では、女性のほうが男性より、意識している度合いがわずかに高い。

遺伝子組換え食品についての、4つの質問の親と子が同じ回答をした割合は以下のとおりである。

- ・ 「自分や家族に健康被害の可能性はある」 51.1%
- ・ 「安全性について検討されている」 48.6%
- ・ 「表示基準等があり安全管理されている」 48.4%
- ・ 「安全性について情報を知る機会がある」 49.6%

Q5-C. 遺伝子組換え食品(別の生物の遺伝子に組換えたりする技術を用いて開発された食品)

【親子】

	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない	平均
--	------	------------------	--------------------	--------	----

自分や家族に健康被害の可能性がある

親(n=2000)	30.0	43.6	23.2	3.3	3.00
子(n=2000)	25.2	41.0	24.3	9.6	2.82

安全性について検討されている

親(n=2000)	13.4	45.2	32.7	8.7	2.63
子(n=2000)	13.6	44.0	30.0	12.4	2.59

表示基準等があり安全管理されている

親(n=2000)	9.7	39.4	39.9	11.1	2.48
子(n=2000)	10.0	41.0	34.8	14.3	2.47

安全性について情報を知る機会がある

親(n=2000)	7.7	28.0	45.3	19.1	2.24
子(n=2000)	7.4	25.5	38.7	28.5	2.12

【親・男女】

	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない	平均
--	------	------------------	--------------------	--------	----

自分や家族に健康被害の可能性がある

男性(n= 713)	28.3	40.1	26.5	5.0	2.92
女性(n=1287)	30.8	45.5	21.4	2.3	3.05

安全性について検討されている

男性(n= 713)	13.7	40.0	34.6	11.6	2.56
女性(n=1287)	13.2	48.1	31.6	7.1	2.67

表示基準等があり安全管理されている

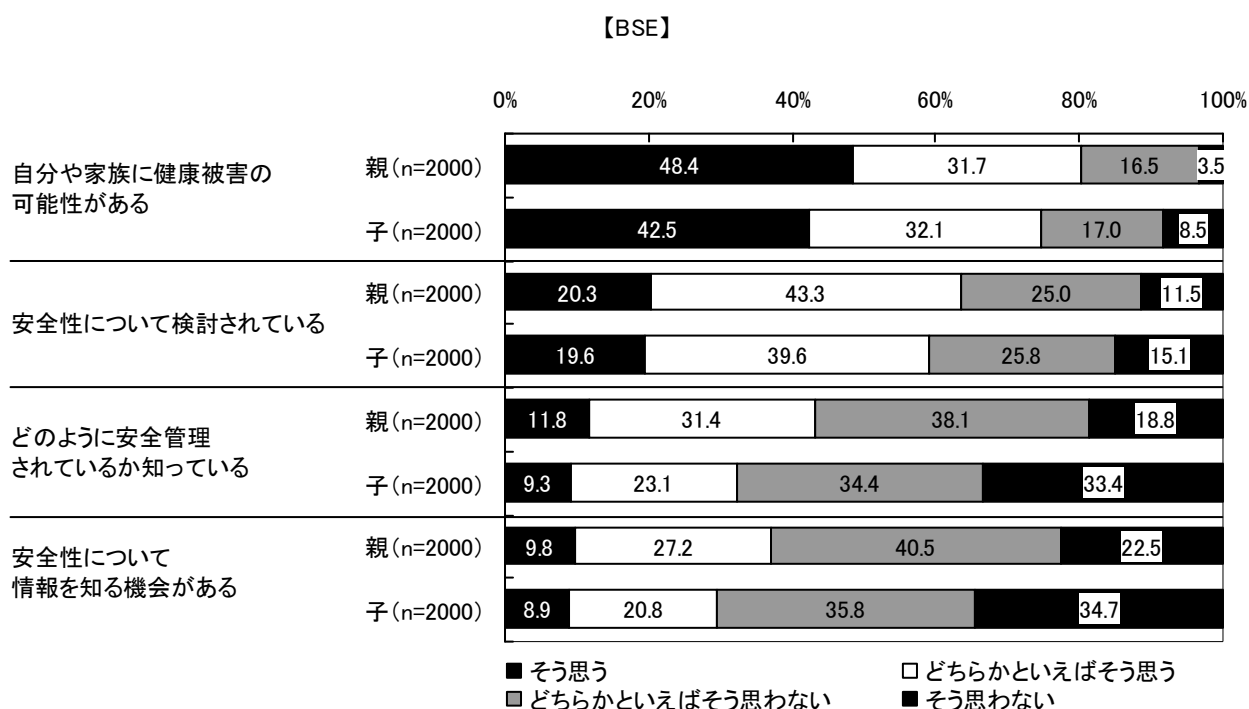
男性(n= 713)	9.1	34.9	40.5	15.4	2.38
女性(n=1287)	9.9	41.9	39.5	8.7	2.53

安全性について情報を知る機会がある

男性(n= 713)	6.5	24.1	46.1	23.3	2.14
女性(n=1287)	8.3	30.1	44.8	16.7	2.30

「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4段階で肯定度合いが高い順に、4→3→2→1と点数化し、回答数を掛けて平均値を算出。

Q5-D. 牛海綿状脳症(BSE) (牛の脳がまるでスポンジのようになって牛の体がマヒする病気)



牛海綿状脳症(BSE)は「自分や家族に健康被害の可能性があると、親の80.1%、子どもの74.6%が意識している。

「安全性について検討されている」ことについては、親子とも「どちらかといえばそう思う」との回答が4割前後で最も多い。

「どのように安全管理されているか知っている」ことについて、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせて親では4割、子では3割程度にとどまっている。

「安全性について情報を知る機会がある」ことについては、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせて、親では4割弱、子どもでは3割にとどまっている。

平均からもわかるように、4つの質問のいずれに対しても、親のほうが子どもより、意識している度合いが高い。男女別では、「どのように安全管理されているか知っている」ことについて、女性より男性のほうが、意識している度合いがわずかに高い。

牛海綿状脳症についての、4つの質問の親と子が同じ回答をした割合は以下のとおりである。

- ・ 「自分や家族に健康被害の可能性があると」 61.2%
- ・ 「安全性について検討されている」 50.4%
- ・ 「どのように安全管理されているか知っている」 45.7%
- ・ 「安全性について情報を知る機会がある」 50.5%

Q5-D. 牛海綿状脳症(BSE) (牛の脳がまるでスポンジのようになって牛の体がマヒする病気)

【親子】

	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない	平均
--	------	------------------	--------------------	--------	----

自分や家族に健康被害の可能性がある

親(n=2000)	48.4	31.7	16.5	3.5	3.25
子(n=2000)	42.5	32.1	17.0	8.5	3.09

安全性について検討されている

親(n=2000)	20.3	43.3	25.0	11.5	2.72
子(n=2000)	19.6	39.6	25.8	15.1	2.64

どのように安全管理されているか知っている

親(n=2000)	11.8	31.4	38.1	18.8	2.36
子(n=2000)	9.3	23.1	34.4	33.4	2.08

安全性について情報を知る機会がある

親(n=2000)	9.8	27.2	40.5	22.5	2.24
子(n=2000)	8.9	20.8	35.8	34.7	2.04

【親・男女】

	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない	平均
--	------	------------------	--------------------	--------	----

自分や家族に健康被害の可能性がある

男性(n= 713)	42.1	33.1	20.3	4.5	3.13
女性(n=1287)	51.9	30.9	14.3	2.9	3.32

安全性について検討されている

男性(n= 713)	18.8	43.3	23.7	14.2	2.67
女性(n=1287)	21.1	43.2	25.7	9.9	2.76

どのように安全管理されているか知っている

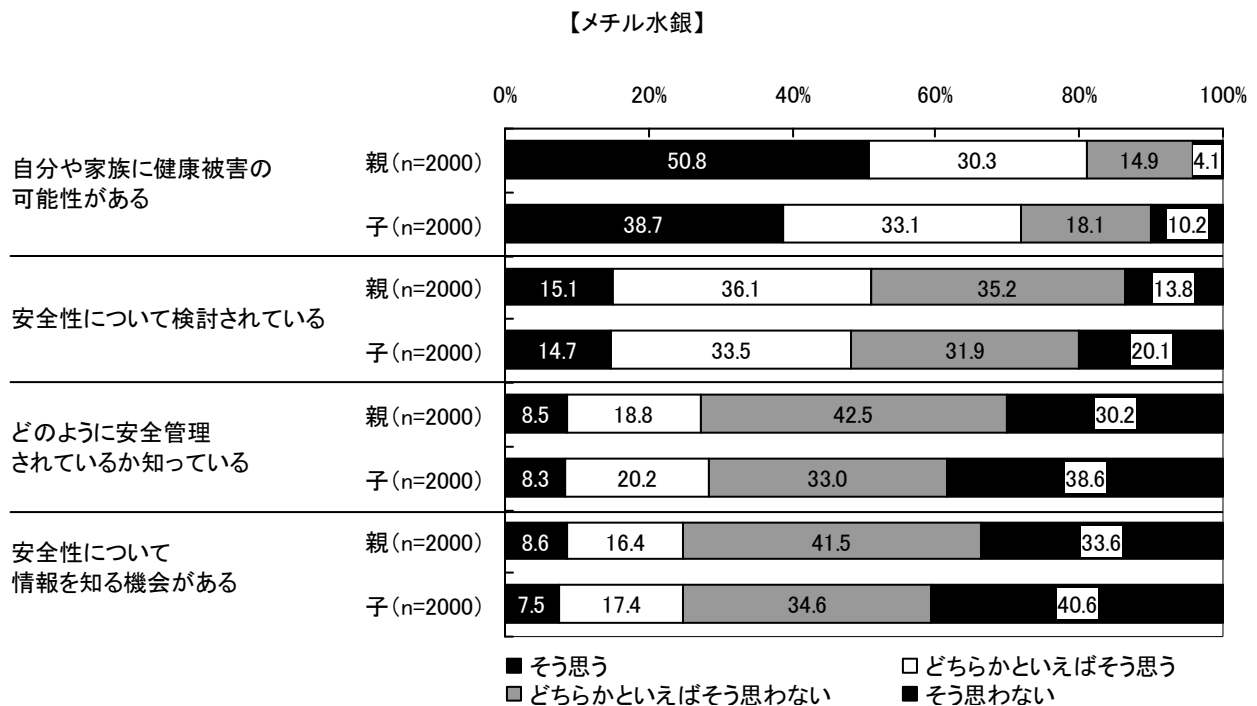
男性(n= 713)	12.3	33.4	35.8	18.5	2.40
女性(n=1287)	11.5	30.2	39.3	19.0	2.34

安全性について情報を知る機会がある

男性(n= 713)	8.8	28.5	40.1	22.6	2.24
女性(n=1287)	10.3	26.5	40.7	22.5	2.25

「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4段階で肯定度合いが高い順に、4→3→2→1と点数化し、回答数を掛けて平均値を算出。

Q5-E. メチル水銀(自然環境の中に存在する水銀の一種)



メチル水銀は「自分や家族に健康被害の可能性がある」と、親の 50.8%、子どもの 38.7%が意識している。

「安全性について検討されている」ことについては、親子とも肯定派と否定派が半数ずつとなっている。「どのように安全管理されているか知っている」ことについては、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせても親子とも 3 割弱にとどまっている。

「安全性について情報を知る機会がある」ことについては、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせて、親子とも全体の 4 分の 1 程度にとどまっている。

平均からもわかるように、4 つの質問のいずれに対しても、親のほうが子どもより、意識している度合いが高い。

メチル水銀についての、4 つの質問の親と子が同じ回答をした割合は以下のとおりである。

- ・ 「自分や家族に健康被害の可能性がある」 60.2%
- ・ 「安全性について検討されている」 51.4%
- ・ 「どのように安全管理されているか知っている」 54.7%
- ・ 「安全性について情報を知る機会がある」 58.1%

Q5-E. メチル水銀(自然環境の中に存在する水銀の一種)

【親子】

	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない	平均
--	------	------------------	--------------------	--------	----

自分や家族に健康被害の可能性がある

親(n=2000)	50.8	30.3	14.9	4.1	3.28
子(n=2000)	38.7	33.1	18.1	10.2	3.00

安全性について検討されている

親(n=2000)	15.1	36.1	35.2	13.8	2.52
子(n=2000)	14.7	33.5	31.9	20.1	2.43

どのように安全管理されているか知っている

親(n=2000)	8.5	18.8	42.5	30.2	2.06
子(n=2000)	8.3	20.2	33.0	38.6	1.98

安全性について情報を知る機会がある

親(n=2000)	8.6	16.4	41.5	33.6	2.00
子(n=2000)	7.5	17.4	34.6	40.6	1.92

【親・男女】

	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない	平均
--	------	------------------	--------------------	--------	----

自分や家族に健康被害の可能性がある

男性(n= 713)	46.8	29.5	17.1	6.6	3.17
女性(n=1287)	53.0	30.8	13.6	2.6	3.34

安全性について検討されている

男性(n= 713)	15.4	35.3	33.1	16.1	2.50
女性(n=1287)	14.8	36.4	36.3	12.4	2.54

どのように安全管理されているか知っている

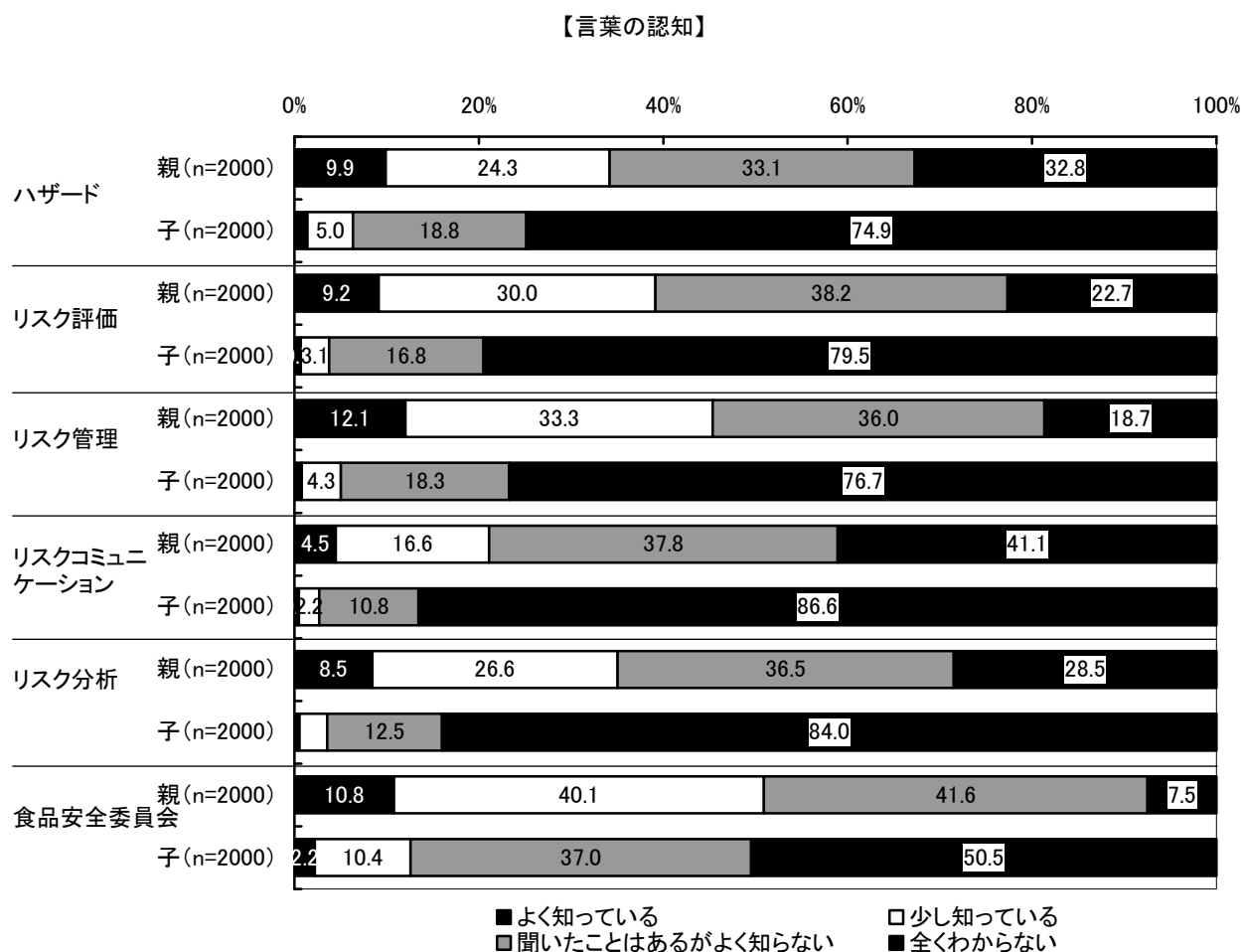
男性(n= 713)	10.4	20.3	40.1	29.2	2.12
女性(n=1287)	7.5	17.9	43.8	30.8	2.02

安全性について情報を知る機会がある

男性(n= 713)	8.4	17.5	40.3	33.8	2.01
女性(n=1287)	8.6	15.7	42.2	33.5	1.99

「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4段階で肯定度合いが高い順に、4→3→2→1と点数化し、回答数を掛けて平均値を算出。

Q6. 次の言葉を知っていますか？



回答の平均でもわかるように、6つの言葉の中では、「食品安全委員会」が最も認知度が高く、「リスクコミュニケーション」が最も認知度が低い。ただし、いずれの言葉も「聞いたことはあるがよく知らない」というのが平均的なところといえる。いずれの言葉についても、子どもは親の認知度をさらに下回っている。親の男女別では、いずれの言葉についても、認知度は男性のほうが高い。

6つの言葉についての、親と子が同じ回答をした割合は以下のとおりである。

- ・ 「ハザード」 39.9%
- ・ 「リスク評価」 28.4%
- ・ 「リスク管理」 25.4%
- ・ 「リスクコミュニケーション」 44.9%
- ・ 「リスク分析」 33.4%
- ・ 「食品安全委員会」 26.4%

【親子】

	よく知っている	少し知っている	聞いたことはある がよく知らない	全くわからない	平均
--	---------	---------	---------------------	---------	----

ハザード

親(n=2000)	9.9	24.3	33.1	32.8	2.11
子(n=2000)	1.4	5.0	18.8	74.9	1.33

リスク評価

親(n=2000)	9.2	30.0	38.2	22.7	2.26
子(n=2000)	0.7	3.1	16.8	79.5	1.25

リスク管理

親(n=2000)	12.1	33.3	36.0	18.7	2.39
子(n=2000)	0.8	4.3	18.3	76.7	1.29

リスクコミュニケーション

親(n=2000)	4.5	16.6	37.8	41.1	1.85
子(n=2000)	0.5	2.2	10.8	86.6	1.17

リスク分析

親(n=2000)	8.5	26.6	36.5	28.5	2.15
子(n=2000)	0.6	3.0	12.5	84.0	1.20

食品安全委員会

親(n=2000)	10.8	40.1	41.6	7.5	2.54
子(n=2000)	2.2	10.4	37.0	50.5	1.64

【親・男女】

	よく知っている	少し知っている	聞いたことはある がよく知らない	全くわからない	平均
--	---------	---------	---------------------	---------	----

ハザード

男性(n= 713)	17.0	35.2	27.1	20.8	2.48
女性(n=1287)	6.0	18.3	36.4	39.4	1.91

リスク評価

男性(n= 713)	18.0	44.5	27.3	10.2	2.70
女性(n=1287)	4.3	22.0	44.2	29.5	2.01

リスク管理

男性(n= 713)	23.3	46.3	23.6	6.9	2.86
女性(n=1287)	5.8	26.1	42.9	25.2	2.13

リスクコミュニケーション

男性(n= 713)	8.0	25.5	40.1	26.4	2.15
女性(n=1287)	2.6	11.7	36.5	49.3	1.68

リスク分析

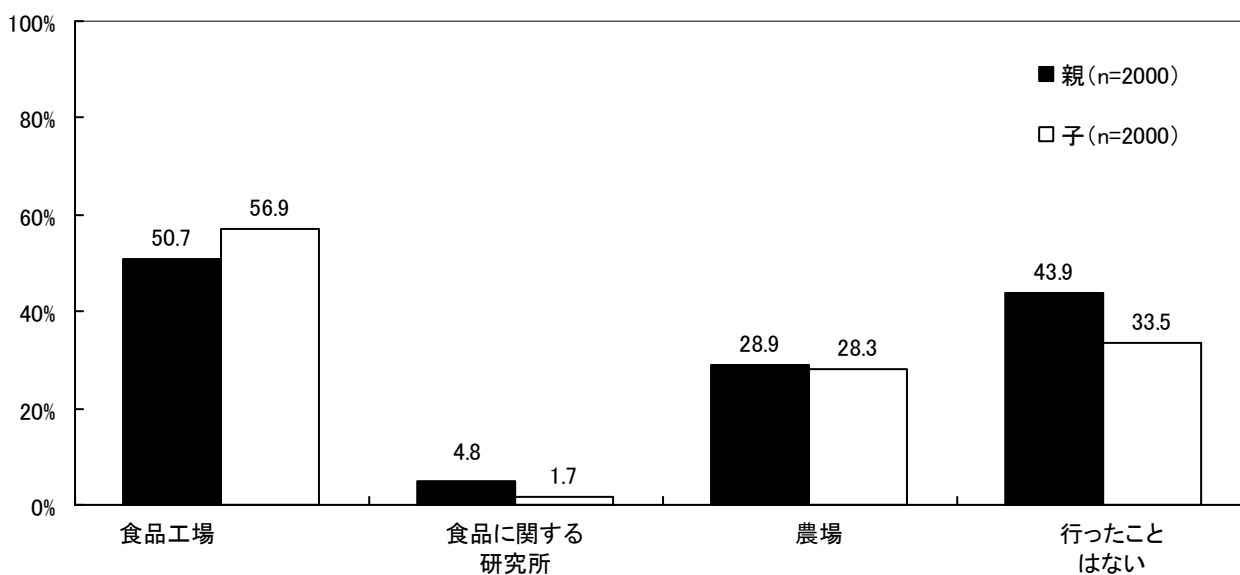
男性(n= 713)	16.4	39.7	29.6	14.3	2.58
女性(n=1287)	4.0	19.3	40.2	36.4	1.91

食品安全委員会

男性(n= 713)	13.7	45.0	34.1	7.2	2.65
女性(n=1287)	9.2	37.4	45.8	7.7	2.48

「よく知っている」「少し知っている」「聞いたことはあるがよく知らない」「全くわからない」の4段階で肯定度合いが高い順に、4→3→2→1と点数化し、回答数を掛けて平均値を算出。

Q7. 以下のようなところに見学に行ったことはありますか？(複数選択可)



食品工場への見学経験は親が 50.7%、子どもが 56.9%でいずれも半数を超えていた。

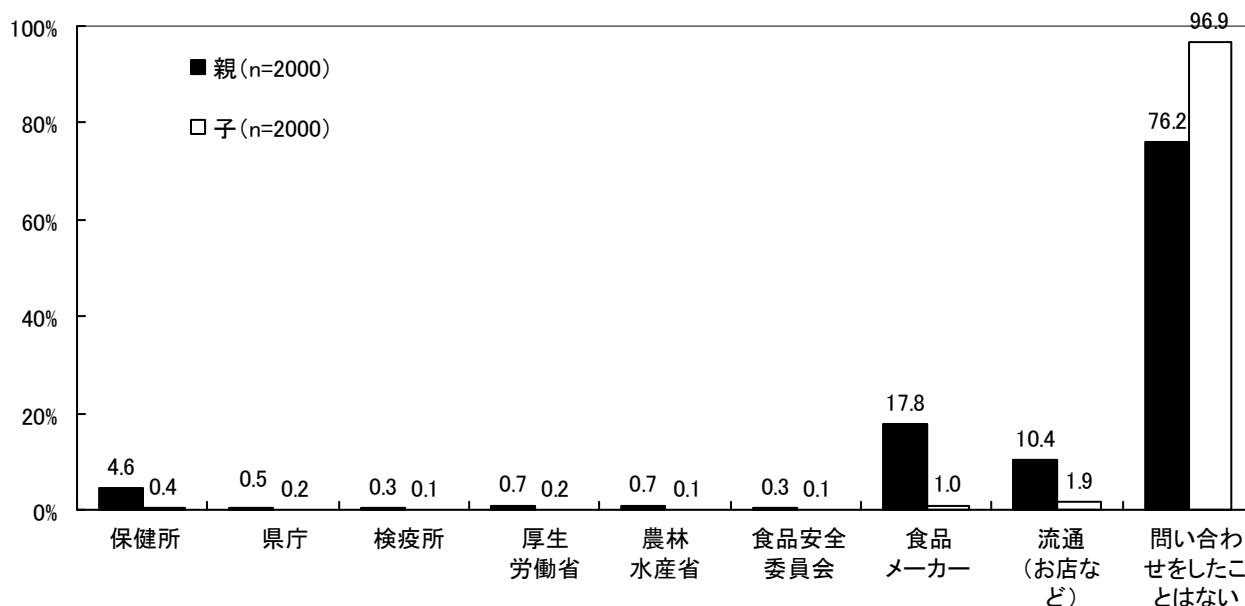
【親子】

	食品工場	食品に関する研究所	農場	行ったことはない
親 (n=2000)	50.7	4.8	28.9	43.9
子 (n=2000)	56.9	1.7	28.3	33.5

【親・男女】

	食品工場	食品に関する研究所	農場	行ったことはない
親 (n=2000)	50.7	4.8	28.9	43.9
男性 (n= 713)	50.5	5.8	34.6	41.8
女性 (n=1287)	50.8	4.3	25.6	45.0

Q8. 食品安全に関することで、以下のようなところに問い合わせたことはありますか？
(複数選択可)



全体の 4 分の1程度の親が食品安全に関する問い合わせをした経験がある。問い合わせ先は、「食品メーカー」17.8%、「流通(お店など)」が 10.4%であるのに対し、「保健所」4.6%、「厚生労働省」「農林水産省」がいずれも 0.7%、「県庁」0.5%、「検疫所」「食品安全委員会」がいずれも 0.3%と公の機関への問い合わせはきわめて少ない。

【親子】

	保健所	県庁	検疫所	厚生労働省	農林水産省	食品安全委員会	食品メーカー	流通(お店など)	問い合わせをしたことはない
親 (n=2000)	4.6	0.5	0.3	0.7	0.7	0.3	17.8	10.4	76.2
子 (n=2000)	0.4	0.2	0.1	0.2	0.1	0.1	1.0	1.9	96.9

【親・男女】

	保健所	県庁	検疫所	厚生労働省	農林水産省	食品安全委員会	食品メーカー	流通(お店など)	問い合わせをしたことはない
親 (n=2000)	4.6	0.5	0.3	0.7	0.7	0.3	17.8	10.4	76.2
男性 (n= 713)	5.9	0.8	0.8	1.1	1.1	0.8	14.3	10.4	77.8
女性 (n=1287)	3.9	0.2	0.0	0.4	0.4	0.0	19.7	10.3	75.3

Q9. 食品安全委員会が行っている意見交換会へ参加したことはありますか？

親に対してのみ、「食品安全委員会の意見交換会への参加経験」を質問したが、「参加したことがある」との回答は1件もなかった。

【親・男女】

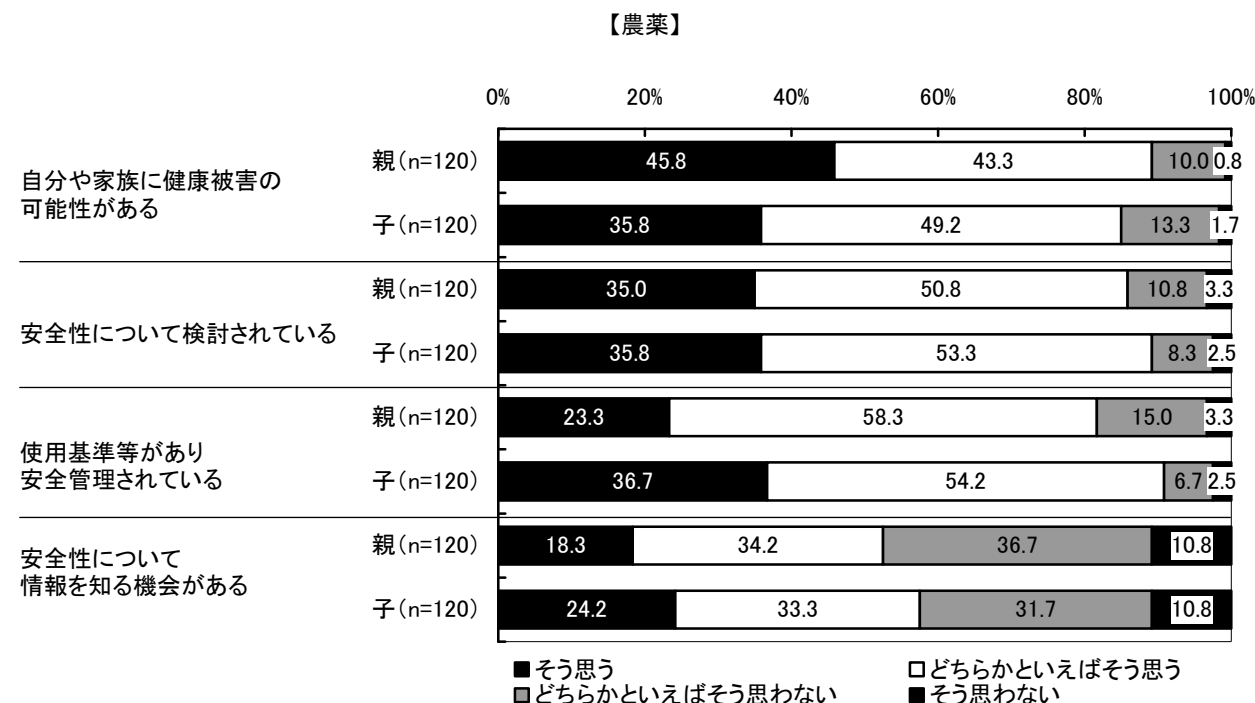
	参加したことがある	参加したことはない
親(n=2000)	0.0	100.0
男性(n= 713)	0.0	100.0
女性(n=1287)	0.0	100.0

2. 啓発効果測定調査

Q1. 食品や農産物に関する次のものについて、あなたはどのように思いますか？

Q1-A. 農薬(野菜などの農産物をつくるときに使う薬)

※図表では小学5・6年の子どもを「子」と表記。以下同様。

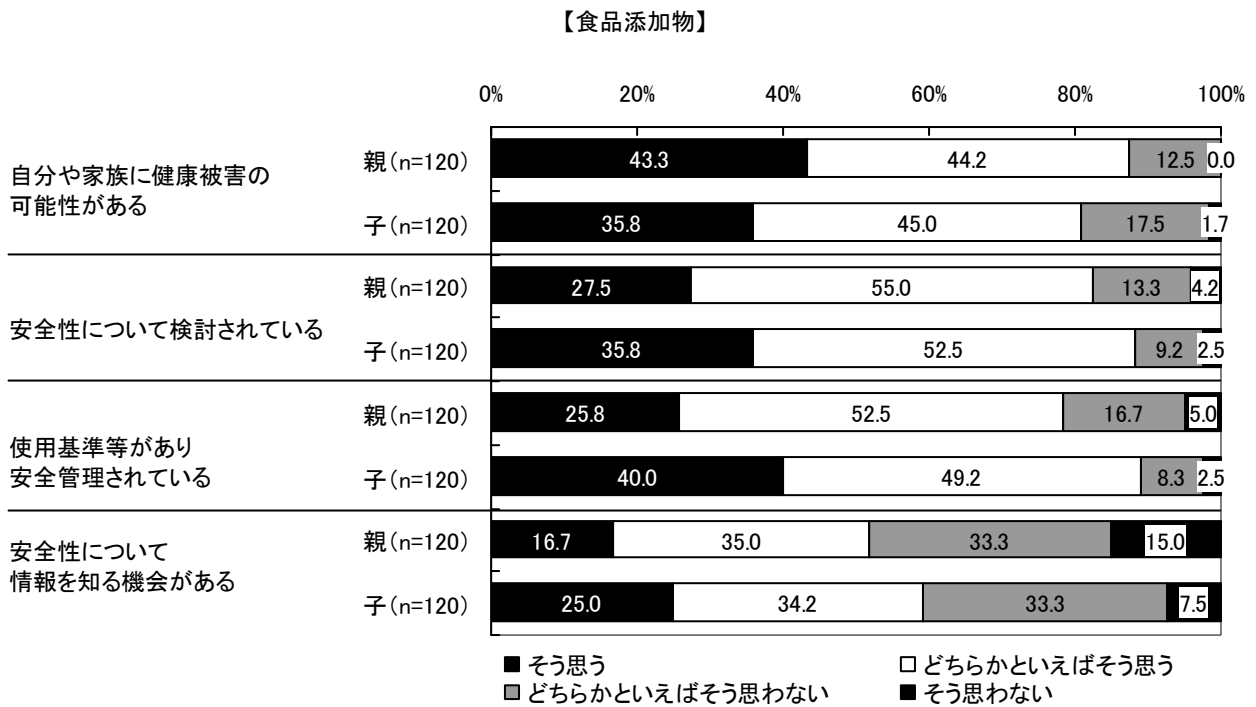


ビデオによる啓発効果測定調査における親子各 120 人の回答結果は図表に示すとおりである。さらに、これらの親子各 120 人の、ビデオ視聴前の肯定的な回答(そう思う+どちらかといえばそう思う)と、ビデオ視聴後の肯定的な回答に着目し、その変化を参考に啓発効果を分析する。→【表右列参照。以下同様】ビデオ視聴前と視聴後を比較すると、農薬についての肯定的な回答は、すべての項目において親子とも増加している。特に子どもにおいては、「使用基準等があり安全管理されている」「安全性について検討されている」について、肯定的な回答が大きく増加し、理解・関心を高めたことがわかる。

	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない	※視聴前→視聴後 n=120 → n=120
自分や家族に健康被害の可能性はある					
親(n=120)	45.8	43.3	10.0	0.8	104 → 107
子(n=120)	35.8	49.2	13.3	1.7	94 → 102
安全性について検討されている					
親(n=120)	35.0	50.8	10.8	3.3	83 → 103
子(n=120)	35.8	53.3	8.3	2.5	81 → 107
使用基準等があり安全管理されている					
親(n=120)	23.3	58.3	15.0	3.3	67 → 98
子(n=120)	36.7	54.2	6.7	2.5	64 → 109
安全性について情報を知る機会がある					
親(n=120)	18.3	34.2	36.7	10.8	61 → 63
子(n=120)	24.2	33.3	31.7	10.8	42 → 69

※親子各 120 人の、ビデオ視聴前→ビデオ視聴後の、肯定的な回答(そう思う+どちらかといえばそう思う)の人数を示す。

Q1-B. 食品添加物(食べ物を作ったり、加工したり、保存するときに使う調味料、保存料、着色料など)



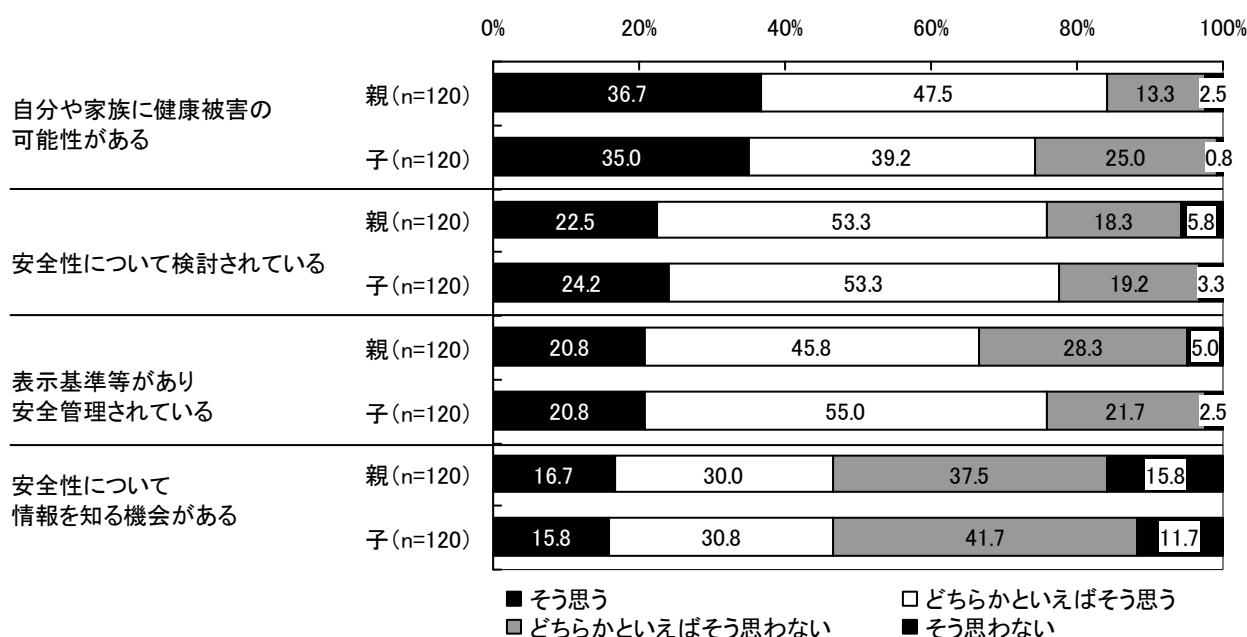
食品添加物について、ビデオ視聴前と視聴後を比較すると、肯定的な回答(そう思う+どちらかといえばそう思う)は、すべての項目において親子とも増加している。特に子どもにおいては、農薬と同様に、「使用基準等があり安全管理されている」「安全性について検討されている」について、肯定的な回答が大きく増加し、理解・関心を高めたことがわかる。

	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない	※視聴前→視聴後 n=120 → n=120
自分や家族に健康被害の可能性がある					
親(n=120)	43.3	44.2	12.5	0.0	100 → 105
子(n=120)	35.8	45.0	17.5	1.7	77 → 97
安全性について検討されている					
親(n=120)	27.5	55.0	13.3	4.2	77 → 99
子(n=120)	35.8	52.5	9.2	2.5	73 → 106
使用基準等があり安全管理されている					
親(n=120)	25.8	52.5	16.7	5.0	62 → 94
子(n=120)	40.0	49.2	8.3	2.5	65 → 107
安全性について情報を知る機会がある					
親(n=120)	16.7	35.0	33.3	15.0	52 → 62
子(n=120)	25.0	34.2	33.3	7.5	36 → 71

※親子各 120 人の、ビデオ視聴前→ビデオ視聴後の、肯定的な回答(そう思う+どちらかといえばそう思う)の人数を示す。

Q1-C. 遺伝子組換え食品(別の生物の遺伝子に組換えたりする技術を用いて開発された食品)

【遺伝子組換え食品】



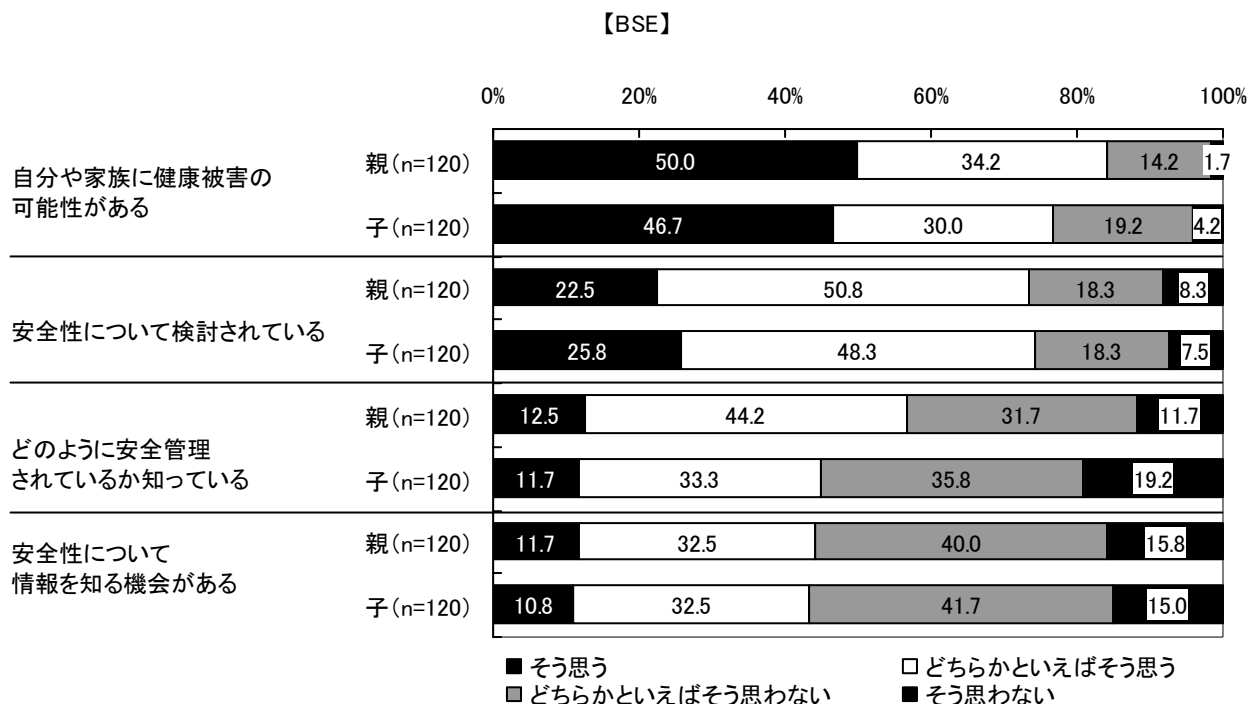
遺伝子組換え食品について、ビデオ視聴前と視聴後を比較すると、肯定的な回答(そう思う+どちらかといえばそう思う)は、すべての項目において親子とも増加している。特に子どもにおいては、「表示基準等があり安全管理されている」について、意識が高まった。

一方、「安全性について情報を知る機会がある」ことについては、ビデオ視聴後においても、肯定的な回答は、親子ともに半数に満たない比率にとどまっている。

	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない	※視聴前→視聴後 n=120 → n=120
自分や家族に健康被害の可能性がある					
親(n=120)	36.7	47.5	13.3	2.5	84 → 101
子(n=120)	35.0	39.2	25.0	0.8	68 → 89
安全性について検討されている					
親(n=120)	22.5	53.3	18.3	5.8	61 → 91
子(n=120)	24.2	53.3	19.2	3.3	68 → 93
表示基準等があり安全管理されている					
親(n=120)	20.8	45.8	28.3	5.0	56 → 80
子(n=120)	20.8	55.0	21.7	2.5	58 → 91
安全性について情報を知る機会がある					
親(n=120)	16.7	30.0	37.5	15.8	37 → 56
子(n=120)	15.8	30.8	41.7	11.7	33 → 56

※親子各 120 人の、ビデオ視聴前→ビデオ視聴後の、肯定的な回答(そう思う+どちらかといえばそう思う)の人数を示す。

Q1-D. 牛海綿状脳症(BSE) (牛の脳がまるでスポンジのようになって牛の体がマヒする病気)

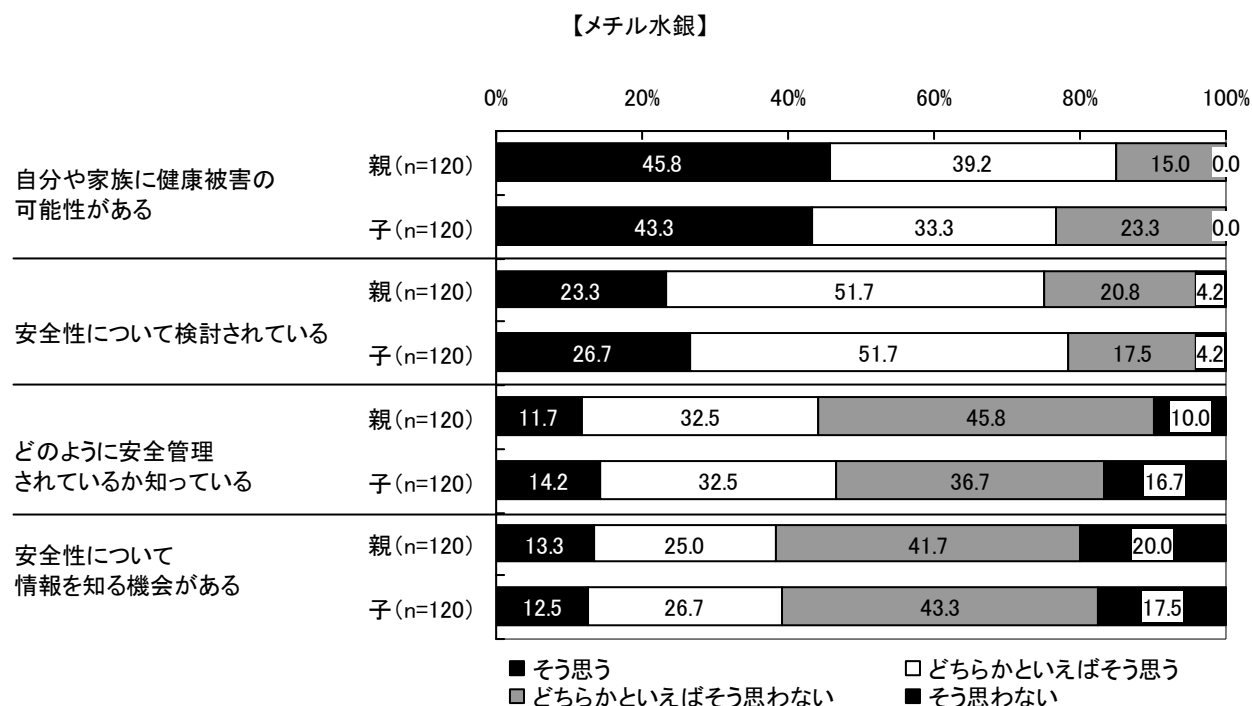


牛海綿状脳症 (BSE) については、特に親において「自分や家族に健康被害の可能性がある」という意識がもともと強く、ビデオ視聴後に大きな意識の変化は見られない。視聴前と視聴後と比較すると、肯定的な回答(そう思う+どちらかといえばそう思う)の増加幅は、農薬、食品添加物、遺伝子組換え食品の場合と比較して小さい。

	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない	※視聴前→視聴後 n=120 → n=120
自分や家族に健康被害の可能性がある					
親 (n=120)	50.0	34.2	14.2	1.7	100 → 101
子 (n=120)	46.7	30.0	19.2	4.2	82 → 92
安全性について検討されている					
親 (n=120)	22.5	50.8	18.3	8.3	79 → 88
子 (n=120)	25.8	48.3	18.3	7.5	65 → 89
どのように安全管理されているか知っている					
親 (n=120)	12.5	44.2	31.7	11.7	57 → 68
子 (n=120)	11.7	33.3	35.8	19.2	26 → 54
安全性について情報を知る機会がある					
親 (n=120)	11.7	32.5	40.0	15.8	46 → 53
子 (n=120)	10.8	32.5	41.7	15.0	24 → 52

※親子各 120 人の、ビデオ視聴前→ビデオ視聴後の、肯定的な回答(そう思う+どちらかといえばそう思う)の人数を示す。

Q1-E. メチル水銀(自然環境の中に存在する水銀の一種)

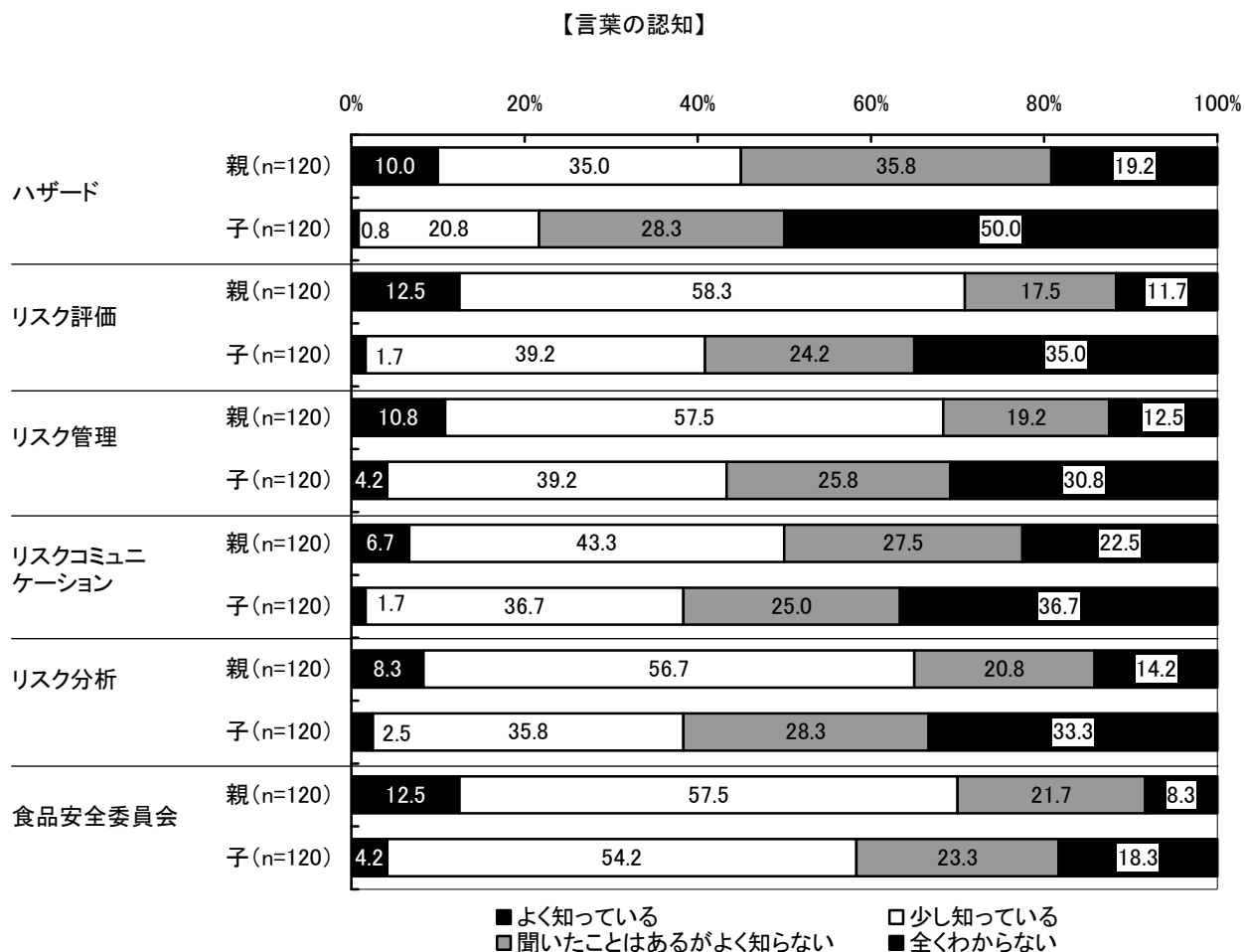


メチル水銀が、「安全性について情報を知る機会がある」「どのように安全管理されているか知っている」について、親子とも肯定的な回答(そう思う+どちらかといえばそう思う)の比率が低い。ビデオ視聴前と視聴後と比較すると、特にこれらについては、ビデオ視聴前の時点で意識が低く、ビデオ視聴後も意識が高まっていない。

	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない	※視聴前→視聴後 n=120 → n=120
自分や家族に健康被害の可能性がある					
親(n=120)	45.8	39.2	15.0	0.0	94 → 102
子(n=120)	43.3	33.3	23.3	0.0	80 → 92
安全性について検討されている					
親(n=120)	23.3	51.7	20.8	4.2	51 → 90
子(n=120)	26.7	51.7	17.5	4.2	49 → 94
どのように安全管理されているか知っている					
親(n=120)	11.7	32.5	45.8	10.0	31 → 53
子(n=120)	14.2	32.5	36.7	16.7	27 → 56
安全性について情報を知る機会がある					
親(n=120)	13.3	25.0	41.7	20.0	30 → 46
子(n=120)	12.5	26.7	43.3	17.5	25 → 47

※親子各 120 人の、ビデオ視聴前→ビデオ視聴後の、肯定的な回答(そう思う+どちらかといえばそう思う)の人数を示す。

Q2. 次の言葉を知っていますか？



ビデオ視聴前後を比較すると、親子ともにすべての言葉で認知度合いは増加している。

意識調査で最も認知度の高かった「食品安全委員会」については、ビデオ視聴によってさらに認知度が高まった。ビデオ視聴により、認知度は、親が7割に達し、子どもは6割まで近づいた。

なお、全ての言葉についても、親のほうが子どもより認知度が高いという傾向は、啓発効果調査結果にも意識調査の結果と同じように表れた。

	よく知っている	少し知っている	聞いたことはある がよく知らない	全くわからない	※視聴前→視聴後 n=120 → n=120
--	---------	---------	---------------------	---------	---------------------------

ハザード

親 (n=120)	10.0	35.0	35.8	19.2	46 → 54
子 (n=120)	0.8	20.8	28.3	50.0	7 → 26

リスク評価

親 (n=120)	12.5	58.3	17.5	11.7	54 → 85
子 (n=120)	1.7	39.2	24.2	35.0	7 → 49

リスク管理

親 (n=120)	10.8	57.5	19.2	12.5	58 → 82
子 (n=120)	4.2	39.2	25.8	30.8	9 → 52

リスクコミュニケーション

親 (n=120)	6.7	43.3	27.5	22.5	27 → 60
子 (n=120)	1.7	36.7	25.0	36.7	4 → 46

リスク分析

親 (n=120)	8.3	56.7	20.8	14.2	50 → 78
子 (n=120)	2.5	35.8	28.3	33.3	6 → 46

食品安全委員会

親 (n=120)	12.5	57.5	21.7	8.3	65 → 84
子 (n=120)	4.2	54.2	23.3	18.3	17 → 70

※親子各 120 人の、ビデオ視聴前→ビデオ視聴後の、肯定的な回答(よく知っている+少し知っている)の人数を示す。